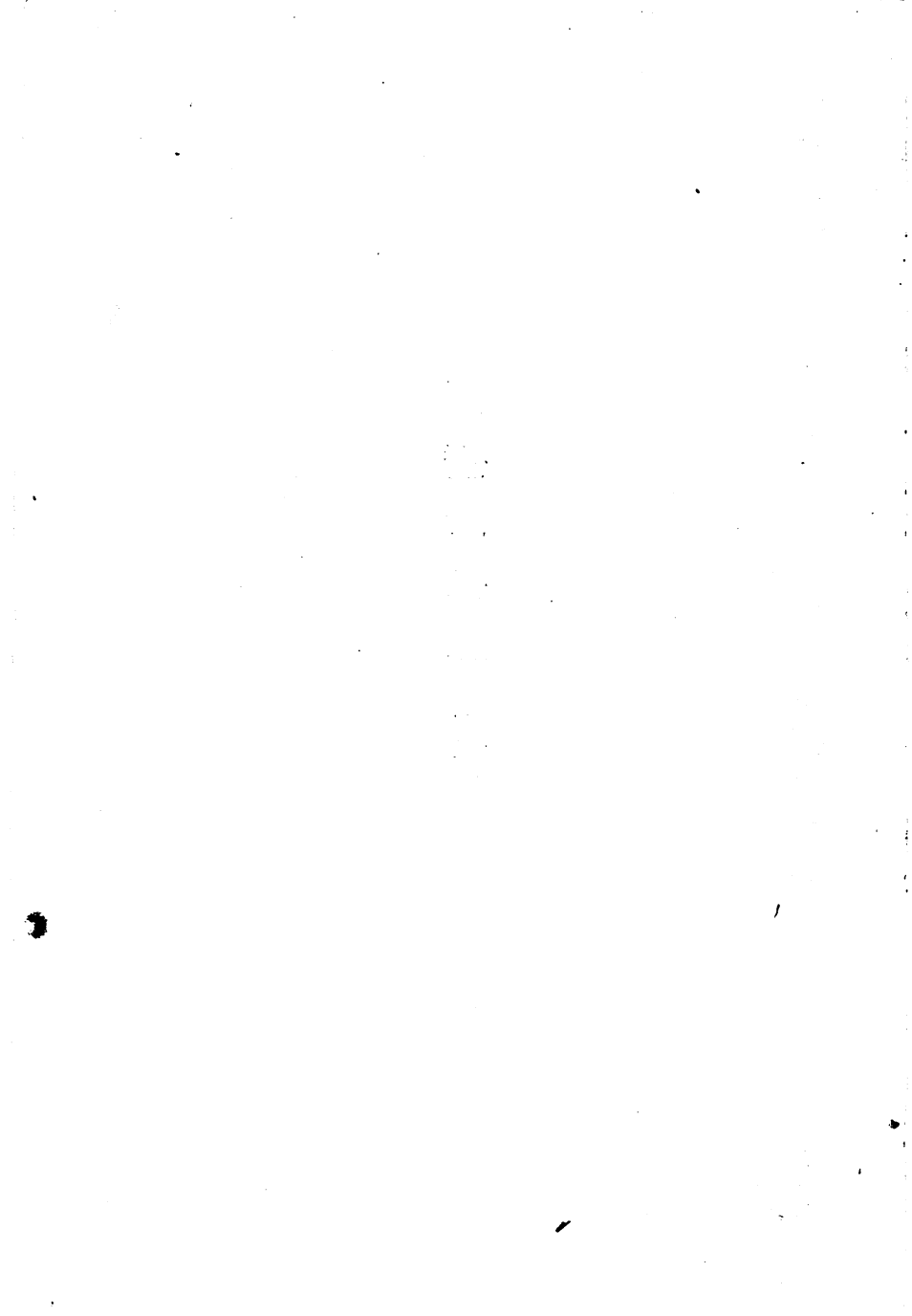


南蠻鐵後藤目貫



後 藤 目 貫

作者 並 木 宗 輔

序詞兄弟は是手足の如く。垣を隔てて諍へども。外あなどりを防ぐといへり。夫婦の中は花衣色をめかへて新にす連る枝の離れなば元の根ざしを得がたしと。筆にいはせてをしへ置く虚無大道の源氏。頼朝公の漂平こそ。ヨロシ武將の大度と。仰なれ。地頭は文治の春の空何か評定有べきとて。御黒書院に出て給へば。在鎌倉の諸大名残らず伺候ある所に。畠山重忠は所勞の痛はり力なく羽翼の臣本田次郎近経陪臣なれども思慮有る男。君の思へも目出度き故。御前。フシ間近く相詰むる。地將軍仰出さるゝは。詞叔も弟九郎義經。姪酒の二つに其身を忘れ者に長ずるのみならず謀叛の企致すよし先達て聞及べり。事大事にならざる内早く討手を差登し。地然るべしとぞ御説有る。伺候の大名誰有つて詞を出す人もなきに。本田ノ次郎進み出て。詞諸歴々を差置いて下郎の某。言上恐れ多く候へ共。義經公の叛逆世上の取沙汰計りにて未だ實否も知らざるに。軍勢をさしのぼされば君の愈忽と世の嘲り。地一應も再應も虚實を糺され下さるべしと。いひも果ぬにお次より。梶原が郎等番場の忠太我は顔にてしらすに出て。詞陪者の分としてこしやくなる念に念拙者が縁類錦戸の太郎伊達次郎といふ兄弟。義經に傍近き出頭委細は彼が書翰にて。天下を奪ん下心に紛れなきとの内通。地疑ふには及ばずと。フシ顔を赤めてせりあふ所へ。地都堀川の御所より御使者有りと知らせの侍。跡についで立出るは。鎌田が後家の貞松尼。次信が母佐藤の局。權の頭兼房いづれも六十にあまれる老人。判官殿よりお便と頼朝公へお目見えは。尾をふむ心地虎の間の。フシ廣びさしにぞ畏る。地大將面を和らげ給ひ。詞遙々下りし義經が三使。何等の用事か覺束なし。口上の趣き逐一に相のべよと。仰に三人頭をさげ。詞主人義經我

我を差下し候段別儀にも候はず。御連枝の中何となく。近年はたゞ御疎意がましく見ゆるに付き。事を含めるいたづら者虚説を構いろくと諭言を致すよし。地萬一お耳へ達しなば御機嫌の程いぶかしく。虚名を申しひらかん爲。参着致し候と。フシ謹て述べければ。地頼朝公はさしうつむき態と有無の返答も。諸士に預けてましまさねば。是ぞ義經の心をさぐる手懸りと。本田の次郎膝立なほしゑせ笑ひ。詞何れもの仰せのごとく下々の轉事取上げいふにはあらね共。楊震四智のいましめを憚り給はぬ義經公。此頃の御振舞不審なきとも申されず心得がたき一通り尋ね申さん言譯有れ。此度御家來武藏坊を始其外の御家臣。南都東大寺大佛供養に事よせ。似せ山伏となり關所を偽り通りし事。義經御存じなかるべきか。取分け富樫の關所にて辨慶が讀上し勸進帳の願文に。諸人の助力を頼て。功德を本朝にあらはさんと。是頼朝の二字を別け。中へ文字を切入れしは我君を滅ぼし。義經公の御威勢を。本朝に顯はさんとの工の詞にあらざるや。扱又諸方の浪人者。忍びくくに堀川へ相集め給ふよし謀反の企ならずして。地今更新規の御家來を抱へ給ふ其仔細。フシ承はらんと難すれば。地兼房ためらふ氣色もなく一々申開くべしと。二人の老女を押退てつゝと出て。詞武藏坊を先として御傍に仕へし御家來。山ぶしの姿と成り奥州へ下りし事御答は至極ながら。先達て彼者共は義經公の不興を蒙り。逐轉致せしやからなれば。勸進帳の願文にあやしき詞候も是以て存せぬ事。扱又諸國の浪人者忍びくくに堀川へ参る事少しも招き寄するに有ず。先年八島一の谷所々の軍に我君の恩顧に預る武士共。尋ね登れば是非もなく。地此段宜敷言上あり御疑の晴るゝ様願上げ奉ると。流るゝ水のよどみなく。フシ斷り立て申すにぞ。地頼朝公打點せ給ひ。詞ヲ、口がしこき兼房が一言。聞入るべきにはあらねども。たとへ義經都にて反逆をおこさば起せ。我爲には大山の麓をせゝる蟻同然。地ちつとも動ずる事なければ。今日の使を規模として。罪をゆるし和陸せん。しかし國家の政道も猥となり。害に禮儀を忘るゝは色と酒とおぼるゝゆゑ。詞ほのかに聞けば錦戸の太郎。靜といふ白拍子を養子となし。義經が心をうばふと聞く。彼靜を人質として鎌倉へ差下せよ。もしさもなくば討手を登し。

地都の館をふみつぶさん。胸を定めて此返答只今せよと宣へば。兼房はハツト計り。違背せば忽に一大事ござんなれ。一期の浮沈爰なんめりと取つつ置いつ思案の體。何がなさし出る番場の忠太。詞コリヤ權の守とやらいちの頭とやら。靜めを人質にて。義經の科赦すと有るは結構な御了簡。忝いと早速にお受申す筈の事。地何としておそなはる横着な髭親仁とかさにかゝれど耳にもかけず。詞御懇志の御誠意何しに否と申すべき。仰せのごとく靜御前差下し候段。地畏り奉ると云はせも果す貞松尼。詞ア、これ〳〵兼房殿心得ぬ早請合。家にも國にも日本にも。かへまいと思召す靜御前人質とは義經公よもや承引なされまじ。地女ながら我々も使の數に加はれば。なぜ相談を致されぬ受持顔は見にくしと。フシ聲もするどに罵れば。詞ヲ、成程三使と言ひながらかく大切な場所になり。女中の智慧に及ぶべきか。地人質の儀は昔より其例あまた有る事と。やり込むれば佐藤の局。詞ヤア舌長なり權の頭。其身に疑有る時は人質は扱置き怠狀誓し。詞も書習ひ。地くもらぬ主人のお心を申し開きに遙々と。東へ下りし甲斐もなく靜様をわたせと有る。お返事は得致すまい。詞ハテサ誤りになるならば。某切腹するばかり。御兩所へ難儀はかけぬ。地お氣遣なされなと思ひ込だる有様に。お受申せば大將甚だ御機嫌よく。地二人の女が渡さじと諍ふも。皆義經を疎略にせざるまことなれ共。權の頭が早速に受合しは忠義の根元。則ち本田ノ次郎近經を請取に遣すべし。同道にて郷へ歸り萬事汝が心を付け。愚弟が輔佐をよくせよと慈愛も深き御仰せ。御座を立せ給ひければ。コハ有難しと三拜を。二人の老女はむつと顔。ハツトいらへもそこ〳〵につれて御前をたつかゆみ。やたけ心をおししづめ。フシ前後の首尾を兼房は。年ばへといひ分別の。深くも遠きもの思ひ近經を。伴ひて都の。空へと。三重へ立かへる。花は三芳野紅葉は龍田。フシ梅は浪花と定まれど。都上藤の風俗には。本フシ詠もいかでまさるべき。地義經公の妾。靜御前を慰に。うかれ出たる東山。お茶屋の軒に幕打せ。色香を銚櫻がり。フシ花も己をかへり見る。地外珍敷おく女中春に青野の草むしろ。かたしきざして四方山を。見晴す中に瀧頭兼房が獨り娘。戀の道には鶉鷹とて當世顔のしやれ者を。迷惑がらすこし。

もと共。コレ爰な横清者。堀川のお館では龜井の六郎重清様の一か二迄に下らぬ男。詞夫をじつと暗がりて。饅頭を喰やうにつれ／＼とだまつてぢやの。コレハしたり又わる口。尤こちからほれたゆゑ。雨のふる程やる文に返事さへせぬ堅いお人。めつたな事いふまいぞ。盗人たけ／＼しいと隠さしやつてもしつてゐる。あの重清様は器量なら武藝なら。地いふ所のない大丈夫。しめ心がよいとの噂。兎角一事が萬事に當る。君へ忠義の侍は。女房にも眞實など。フシ仇口々の其中へ。義經公の麓までお出を知らせる先走り。フシ仰を請て。龜井の六郎。花のふゞきを打はらふ扇の骨もたくましき。力盛りの角前髪。あゆみ來るをちらと見て。彼がそれそこへこちらは粹ぢやはづしてやる。誰もない間に片陰で。水遊びは鵜鷹殿こなたの得物ぢやないかいの。ちよと濡さしやれと引連て。フシ暮のかげにぞ氣を通す。地わるじやれなさつきにから。ちひさう成る程なぶられたもよそ／＼のお人ゆゑと立寄れば。すつと摺拔幕のこなたに手をつかへ。君も追付け御登山。さぞ御退屈なさるべし。しかし鎌倉の聞えも有れば。随分密に御遊興。入相の鐘待たずとも還御をお急ぎ然るべしと申上ぐれば。詞ヲ、堅。たまさかな御遊山にくると其儘せはしない。モウお歸りを催促かえ。そんな事いふ手間で。女房共も來てゐるかと。たつた一口たのみますと。地取付くを振はなし。御眞實成數通の書翰。心もつて忝し。さりながら御親父權の頭兼房殿は。沙汰に乗つたる昔人。嚴格な御心から。此龜井を不義者などと御さげししも恥かしさに。態と御報を致し申さず。折を見合せ媒を頼み。表向より迎へ申さん。地少も辭退の心底ならず。先づそれ迄は御用捨と。四角四面な切り口上。詞テモ扱も／＼。いやてはないといふ事さふなが。少しも辭退の用捨のと。女房に迄いんぎんな。いやてないのが定ならば。とゞ様はわし次第。地媒も何にも入ぬ。結納の印に幕の陰。ほん／＼に抱付いてと手を取れば。詞ア、是々。靜様が見てござる。姫中も臥いてぢや。ハアテ大事ないわいの。あなた方はとうから御存じ。お呵はござんせぬ。地ひらに／＼と摺よつて諍ふ内に幕しぼらせ。フシ立出給ふ靜御前。六郎ははつと赤面飛しさつて手をつけば。鵜鷹もどふやら氣味わるく。もち／＼

としてひかへゐる。詞ア、コレ苦しい重清殿。先達て鵜鷹の話折もあらば自が謀せんと思ひし所。今日幸の新枕。兼房へは我君から娘と龜井と女夫にせいと。つい一口おつしやつたら。さらりつと埒明く事。地其氣遣ひなら此靜が。手形をかいて請合ぢや。誰もない間にきりくはやう。幕の内て祝言のお紐ときを頼みます。ソレ鵜鷹氣が付かぬ。何とやらしんしやくを指合の出來ぬうち。フシエ、はがゆいと宣へば。地アレあのやうに。靜様がお世話なさるる手前も有りちやつとごんせと手をとれば。それでも夫が。どうかうのいやおう云はさず引立られ。フシ是非なく幕へ入にけり。地物見をそつと指足にて。のぞいて見たりさゝやきて。顔は上氣の濃紅葉高はあからむ折からに。大將九郎義經公。大廣袖をたぶやかに昔平の宗盛が。湯屋を愛せし奢のごとく。詰車やどり馬とどめ。爰よりかちの花見酒。錦戸伊達の兄弟を御供に召具せられ。幕のこなたに立給へば。靜御前歩み寄。詞私を先へおこして置て。今朝程より待兼しに何とお出の遅かりしぞ。地御道草の深入かと。恨み給へばはやく笑。詞ちつとの間傍に居ねば。もう御機嫌がそこねる。シタガ道々。折知り顔に咲亂れたる櫻を見ても。そもじの姿と。心の花にくらべてみれば。いづかなく。ナ汝等もさうは思はぬか。いか様君のおつしやる通り。自慢致すぢやなければども。娘が器量に氣を吞れ。今日は花めがしほれて見ゆるナア弟。さうてないか。しほれた段か。山中の櫻めらがしよげに成り。見すばらしうみえますと。地何かな御氣に入替り立かはりたる追従は。フシ見苦しくも又いやらし。地をりから麓の方よりおゝいおゝいと女の聲。誰成るらんと振返れば。佐藤の局貞然尼足を空にかけ來り。詞堀川の御館へと心せく道すがら。花見の御遊と聞いたるゆゑ。地すぐに是迄参りしが。一大事こそ出來たれと。息繼あへぬ二人が面色。詞何一大事とは心えず。地仔細いかにと錦戸兄弟間かくれば詞を揃へ。詞此度の鎌倉下りは。義經公の御身の上誤りなき申譯。一々言上したりしに承引の上。頼朝公の仰には。靜御前を入質に渡せよとの御難題我々は吞込ず御返答も致さぬ内。權ノ頭兼房殿いかにもお渡し申さんと。御前にて慥の受合。則ちおそばに在合せし。重忠の郎等。本田の近經御迎の役を請け。

同道にて都へ登り。地栗田口より我々はかけぬけての御注進と。いひも果てぬに人々はあきれ。フシ果たるばかりなり。地靜御前は涙にくれナニ自をはるゝの鎌倉へ下すとや。君と國との爲ならば。唐高麗へ行とても。さら／＼いとふ。フシ心はなし。地御得心もなされぬ上無體に引わけ送るのか。何ぼでも我君に。離れて東へ下りはせぬと。スエ泣入り給へば錦戸兄弟。是ぞ幸ひ兼房を。追ひ退けんと進み出て。氣遣すな鎌倉へは下さぬ。君しろし召れずや。さいつ頃より頼朝公。専色を好み給ひ。女を集め給ふと聞く。靜の器量を聞及びおね間の伽との思ひ付き。人質に事寄せ。誠は妻になさるゝ工面。コリヤ兼房めがたらしこまれ。まいないの鼻ぐすりて請合うたに極つた。地につくいやつかゝはせんと。伊達諸共に齒をかみしめ。フシおだてかけたる讒言に。地義經甚だせかせ給ひ。家國にもかへまいと。寵愛の靜御前。兄頼朝が辯舌にのせられ。人質に渡さんとは奇怪成る老ぼれ。きやつも此場へ歸るは必定。汝ら兄弟心を合せ。一番手二番手と組子を定めて生捕よ。地なぶり殺しにさいなんて不忠の臣に見せしめせんと。以の外に怒らせ給ひ。靜こなたへ二人も來いと。二人の老女をいざなひて。フシお茶屋の内へ入り給ふ。地兄弟そろそろ身拵へ。數多の家來を捕手の手くぼり。アレ／＼向ふの人聲は兼房めと覺えたり。詞さりながら。年寄でも大體のやつならず油斷せば仕損せん。アノ岩かげに隠れゐて。地やりすごし繩かけん必ずぬかるな合點と。うなづき合うて大勢は。オクリこかげにゝ忍びゐたりけり。地俵者は賢者に似るとかや。錦戸兄弟に迷はされ。義經の不行跡。鎌倉の怒り強く。さるに依つて家中で一の權の頭兼房を。鎌倉へ下されしに只今歸國の歸りがけ。是れも花見を聞付けて麓に本田を待せ置き。フシ其の身は直に歩みくる。地折よしとやり過し後より雜人原。取つたと十手振り上ぐれば。ひつばづして利腕取り。詞シヤ慮外なる下郎めと。二三間投退れば。地残るやつばらさわぎ立ち。番手の手譯もごつちやに成り。一度にかゝるを事共せず。かたはし抓んで狗投げ。命から／＼岩角に。すてつべいを打割られ朱に成つて逃ぐるも有り。胸骨をられて引くも有り。錦戸兄弟苦ふるひ。フシ麓をさして逃にけり。

地いづく迄もと追かくるを待った／＼と聲をかけ。龜井六郎股立取り進み出で。詞ヤア兼房。科は心に覺あらん。上意を請けて縄かくる。異變あらば首にして。御前へ伴ふ覺悟召れ。ナニ某を面縛せんとやムウ面白し／＼やみやみ縄はかゝるまじ。地イザこいやつと我強き老人。するりと拔て待ちかくれば。是非なく龜井も抜き合せ。秘術を盡す若手の働。權ノ頭も古兵陽に開き陰に閉ち二人が劣らず。三重戰ひけり。地はるかに見るより。鶴鷹がかけ寄りノウこれ待つてと留めてもとまらぬ太刀さばき。詮方つきてお茶屋の障子。引はづして二人が中。フシ身を捨て重しとこけかゝり。ノウ待ち給へ我が夫父上も聞入れて。いふ事いはして下さんせと歎くを兼房聞答め。詞ムウ心得ぬ娘が一言。我が夫とは誰が事。サアいひたいとは其譯。常々お前の目を忍び。六郎様を戀ひこがれ。文玉章で契りに。今日といふ今日。靜様の御媒にて夫婦の盃。スリヤ重清と女夫に成つたか。ホ、御免しなまき内にさげしきも恥しながら。靜御前の仰にて力なく縁を結ぶ。然るに我が君拙者を招き。其元に縄をかけ。引立こよとの御怒り。縁有れば猶用捨もならず。只今の仕合と。斷り聞て兼房は。何思ひけん拔たる刀。すぐに弓手の脇腹へぐつと突込引廻す。ナウ情なや何事と。娘は取付き半狂亂。六郎も驚きながら。コハ何ゆゑの御生害。縁組まれし事。不足にばし有つての事かと。尋ねれば色も變ぜず。七十近き今日迄。娘に簪を取兼しが。六郎を夫に持つたは。出かした娘大きな手柄。地縁有ゆゑに赦されずと。義を守つたる今の働。天晴古今の簪を取嬉しい餘りの。フシ切腹ぞや。詞引出物は忠義の一句。代々源氏に仕へる。某とのにくしみ。靜御前を鎌倉へ。渡さんと請合しゆゑ。御咎めと覺えたり。地エ是非もなや御運の末。此度の鎌倉下り。疑ひ深き頼朝のお心。人質として靜を渡さば。御中和睦有るべしとの御難題。詞いやといはゞ早速に。大軍を以て貢來らん。我が君色に迷ひ御座ゆゑ。數多の家臣が取々に。諫かれたる靜御前。引わけて東へ送らば。御身も納り一つは又。親と名の付く佞人の。錦戸。自然とお傍を遠ざからん。彼は國家の爲と思ひ。地扱こそ請合。もし御得心なされずば。御病氣といひのばし。隙取る内にしつかりと。味方の臍を堅めん

爲。とはいへ不興を請けたる某。何を云ふも申斐有るまじ。殊に一旦武士の約束。今更何言譯に。頼朝公へ切つたる腹。此詞を能く守り。二つ取には人質を。すゝめられよ龜井殿。頼むゝと今はまで。忠義を忘れぬ心の丈夫。娘は餘りの悲しさに。物もえいはずしやり上げ消入ばかりに。フシ歎きける。詞六郎も目をしばたゝき。とても此深手にて。御存命は叶ひがたし。譲り置かるゝ御遺言。逐一に相心得。宜敷計らひ申すべし。地御心安かれと涙ながらに老人の。心を破らぬ一言を。嬉しげに打うなづき。詞ヲ、重ねゝ祝着せり。地此世に用なき某。髻舅の盃に御苦勞ながら御介錯。フシ髻殿頼むと合掌すれば。詞アいや其儀は御意にそむく。地たとへお呵りうけるとて。拙者に討てとは曲もなし。詞然らば娘汝を頼む。コリヤ。是程めたい婚禮に。なぜ泣をるぞほへなやい。地苦痛さすのは大不幸。早う父が首を討てエ、つがもない事おつしやります。なんぼ孝に成るとても。勿體ない親の首。そればかりはゆるしてたべ。お留守の内に殿御を持ち。おかへり有つて御機嫌が。そこねもせんかと案ぜしに。悦び給ふが猶悲しい。叱られても叩かれても。助けらるなら助けてたべ。我が夫やいのと伏轉び。ステアやも涙の悔み泣。詞エ、めろめろとはえづら。今にも本田が来りては。此兼房が犬死。地泣事はないサアゝと。いひつゝ親子一生の。別と思へば目に溜る。涙かくして居る内に。麓より来る人聲は。本田が迎ひ事急なり。とても未練な兩人に介錯は頼まじと。突込む刀取直しうなじに押當ゑいゝ聲。我と押切る覺悟の臨終。フシ首は前にぞ落てげり。地娘は死骸に抱付き。フシ前後の涙に取亂す。地龜井六郎涙をおさへ。コリヤゝ泣て居る所てなし。こなたへ來れと死骸を抱へ立上れば。女房もかひなき父の首。かきいだき。フシ涙ながらもかひなくしく。夫につれ立ち入けるは。ヨクリ哀れと。へ人もしられけり。地程なく来る本田の次郎。田舎めかざる男ぶり智勇備はる骨柄にて。ゆうゝと立出て。幕のこなたに手をつかへ。詞將軍の御前にて。契約有りし人質靜御前を渡されよ。御迎の爲本田の次郎是迄推參仕る。兼房はおはせぬか。權の頭はと呼はる聲。地かくと傳へて暮しぼらせお茶屋の内より對の六尺。靜御前の乗物を。フシ櫻の木陰に

かきよすゆれば。地引つゞいて龜井の六郎禮儀正しく兩手をつき。詞ムウ聞及ぶ本田殿遠路の御迎駕御苦勞千萬。随つて兼房がお受申せし人質。義經公にも許容有つて。お渡し申す靜御前。地お受取下されと。フシ慇懃に相述べれば。詞ホ、早速に御得心御連枝のなかつまじく。御世長久の基ぞや。地慮外ながら作法の通り。改めの爲御目見えと。立寄つて乗物の戸を引き明くれば。靜にあらで兼房が白髮首。三方に乘せたるてい。コハそもいかにと驚きしが。ム、ウ扱は義經得心なきゆゑ。義にたくましき權ノ頭。鎌倉への言譯に。切腹せしか殘念やか程切成る志。無下にはいかでなすべきと戸を引立て六郎に向ひ。詞契約の通り靜御前相違なく請取つたりと。地思ひの外成る挨拶に。ぎよつとせしが膝すり寄せ。詞改められし乗物は靜御前に違ひなきや。却つて手前に合點參らず。ホ、さも有らん御尤の御尋ね。畢竟靜を渡せと有る頼朝の御詮意は。御和睦の印なくては叶ふまじとの御難題。一度武將の詞を立て渡されし兼房の心底。請取つたれば事済んだり。しかし此事沙汰有つて。餘人にかくともれ聞え。地將軍の御詮を背く天下の政道足らぬゆゑ。又もや國家の煩ひと成る。只其元と我ばかり。他にもらさぬが肝要ぞや。心え給ふか龜井殿といふに嬉しく頭を下げ。詞成程御邊察の通り。我君得心あらざるゆゑ。頼朝公への申譯に。權ノ頭の生害。此趣を申上んと存ぜし所。はや細道より靜を同道。還御成れば力なし此首を靜にして請取給はる御了簡。何しに外へもらすべき。萬事貴殿の御働き。宜しく頼み存ると勇士と勇士の詞詰。詞ヲ、氣遣有るな鎌倉の御前は拙者に任されよ。地早お暇と目禮は互につゝむ一大事。言はず語らず六郎は。フシ立別てぞ入りにける。本田は龜井が忠心を深く感じて立つたが。日も夕陽にかたむけば片時も急ぐ旅行ぞと。下部を呼び出し乗物つらせ。フシ立歸らんとせし所へ伊達ノ次郎家來引ぐしどつとかけよせ。詞御寵愛の靜御前。無體に召具し歸るとて歸さうか。此方へ戻せばよし異議に及ばは本田次郎置土産に首を取る。地返答せいときめかゝれどちつとも騒がずからくと打笑ひ。詞ヤア義蟲めらがほざいたが。頼朝の御詮にて請取つたる人質。渡まいが何とする。地ソレ物いはすな討つてとれ。畏つた大勢が。つばなの穂先

と抜きつれて切りかくれば近經も抜合せ縦横微塵に切りまくれば前後の敵にあぐみし所へ龜井の六郎躍りいで。手頃の櫻木ゑいやつと抜くより早くかたつばし。はらり／＼と　フシなぎ廻れば。地さしもの大勢支へかね。空にしられぬ雪あられ。むら／＼ばつと逃ちつたり。隙をうかゞひ伊達ノ次郎。家來横淵藤次を引き連れ引返して。詞コリヤコリヤ横淵靜は爰に奪かへせと。地主從立寄り乗物の。戸を引明てコリヤどうぢや。詞兼房めが白髪首。エ、役にも立たぬ骨折損あたいま／＼しい老ぼれと。地土足にかけて踏散す。後へ本多が取つて返し。かくと見るより大きに驚き。詞それ見付けたら赦されずと。地飛んでかゝれば伊達次郎。コハ叶はじと物をもいはず逃る向ふに龜井の六郎。顯れ出づるをかいぐり　フシほう／＼逃けて失せにけり。地横淵は度を失ひ。うろたへ廻るを本田の近經。ぎやつとのめらし足下にふまへ。詞エ、ぜひもなやモウ叶はぬ。鎌倉には梶原が家來番場の忠太といふ候人。錦戸兄弟に縁有るやつ。きやつが見付し上からは。靜御前でなき様子。忠太が方へ内通して。鎌倉中へ取沙汰せん。さすれば最前いふ如く。二度御中不和と成り。天下の騒ぎ程有るまじ。地入魂も互に是迄と。にがり切つたる殘念顔。かく迄心をつくされしに顯はるゝ上力なし。重ねて互ひの對面は。戰場にてこそ致すべけれ。詞ヲ、サ／＼いふにや及ぶ。サア血祭の其下郎。御邊は頭拙者はすね。地イザ／＼お出と兩人が。力に任せ兩方へ。引けばすつばりほゞづき首。フシちぎれて空しく失せにけり。地今迄せつ成朋友も。義を見て勇む二人の勇士。うちに劍を抱けども。表へ出さぬ忠臣義士。フシ立別れたる有様は。増長持國廣目天。毘沙門天の忿怒の相。帝釋天の荒れたるいきほひ。花ふみしだく東山。谷の水音　ごう／＼／＼降三世。峯にひゞくはどう／＼。どつとふきくる嵐につれて。韋駄天走りに立歸る末代。ふしぎのまれ者やと感ぜぬ。人こそなかりけれ。

地神は人の敬ふによつて威をまし。人は神の徳による。近江の國栗本郡水府神の縁日と。上下さゞめく海道に樽を枕に餘念なく。浮世を夢と吞みくらし。世をへつらはぬ曲者有り。元來弓馬の家に住み。孫吳が術に達せしゆゑ。近江他國の大名より軍師に招き給へども。生國はなれ此邊に。刀をのみと鎌子にかへ。目貫の職を仕習ひて酒より外に主なしと。吞んで明かして行だふれ。月に三斗で足されば。フシ五斗兵衛といひはやす。地神参りの貴賤立集り。詞ヤ此醉どれば追分の目貫師の五斗ではないか。ム、扱も呑だの。跡の村から酒の匂ひ酒屋が有ると思うたら此わろ。地こちらが目からは人でなし。よう見て置けと跳橋の跡から来る上戸仲間。詞ハツア給られて好もしやと。ても吞むなら。あれ程に。吞むでなければ人でなし。地皆も見ておきやあやかり者と。そしれば響る参れば下向。行つ戻りの口ずさみ。フシ是も御縁のはしならん。地暫く有つて庄屋年寄いかつがましく駈來り。詞コリヤ往來の道をふさぎ。狼藉な喰ひどれ鎌倉の御上使本田次郎近經様のお通り。地起上つて片寄れと。ゆすりわければ大あくび。頭も上ずのつとり聲。詞ハレどんとやかましい。鎌倉の上使が何ぢや。此男は忝も都の土地に住みなれし。義經公の御領分の職人。頼朝殿は關東の將軍。鎌倉でこそ大事の殿様。都者はへちまの皮。上使でも本田でも。片寄道理微塵もおじやらぬ。邪魔にならばそつちから。除て通つてもらひましょ。地あつたら夢を見残したと。足なげ出すぞんざい者。引ずり起してぶてたゞけと。騒ぐ程なく近經はヤレ待てさなせそ。思ふ事有りと乗物つらせ。フシしづ／＼とあゆみ寄り。詞コリヤ／＼賣人。義經公の御下。都の地に住居すれば。鎌倉の某に禮儀せぬとの言分一理あり。さりながら。アレ乗物にお渡り有るは義經公の。思ひ人靜御前。囚と成つて鎌倉へお下り。汝が敬ふ義經公の御臺同然の靜御前。立上つて三拜せよと。地理を理でおさゆる一言に。ハット驚きむつくと起き。乗物をためつすがめつ近經や。家來が顔を見廻し／＼せゝら笑ひ。詞ハ、世は末世に成つて侍も啞つくの。よいかげんにおなぶりあれ。地其手はたべぬと又ころり。寝るをねさせず引起し。詞靜殿と聞きながら禮儀もなさて尾籠の振廻。其上武士を偽り者とは緩怠

成愚人めと。地きめ付くれば色も變せず。詞アレまだけふとひ偽りの。アノ乗物の中がなんの靜どの。地はけ物でがなござらうと。いふもゑせ者間も堅意地。詞イヤ御供する某さへ。見違へぬ靜殿を似せ物といふ仔細は何んと。ヲ、それ程聞たか申して聞けん。惣じて人に五運六氣とて。五臟六腑より出づる息。引息。聲なうして。物にぎはし。然るにあの乗物。自然と日のめのさしやう薄く。御自分を始め二合半の髻奴迄。五音の調子のいまはしさ。某が目や耳には。しつかい坊主のない葬禮を見るやうで。生た人とは思はれぬ。それでもあれが靜様ならろくな靜じやござるまい。青靜か泥靜か。地氣の毒顔が見えすくと。フシ見通すごとく言立つれば。地さしも明智の本田次郎。返答もなく口ごもりや。打守り居たりしが。詞ム、扱は儕都のやうす傳へ聞しやつならん。助け置いては後日の妨。觀念せよと切りかかるを。地枕の手樽ではつしと請留め。一と跳はねて起上り。五斗は前後に眼をくばり心ゆるさぬ煩魂。本田は少しもたるみを見せず。詞きやつ生捕て土産にせん。ソレ家來共繩を懸よと下知すれば。地承て兩方より取つたとかゝる二人が肩口。詞兩手に抓んで車投。地跡よりかゝるを蹴飛ばし蹴かへしあたりをにらんで。フシ二王立。地又一時に立かゝるを。本田は聲かけ。詞ヤレ暫く。手並は見えたり。家來共慮外すなど。地遙に遠ざけ。うや。敷草叢に手をつかへ。詞ふしぎ成るかや貴公の詞。成程乗物は靜殿にあらず。五運六氣の考。我々式の及ばぬ所。猶も御心を引見ん爲。家來にいひつけ無骨の働きまつびらまつびら。それに付御尋ね申し度筋有り。地怒りを休め下されよと。いふにこなたも胸休まり。ゑがは作つて是は。御慰撫な。詞たつた今迄殺さうの。イヤしはれのと有つた私。尋ねたきとは何事でござります。サ、砂でお手がよごれましよ。地お上。といふを察し。近經近くさし寄り。お尋ね申すは餘の儀にあらず。此大津の追分に今井家の御浪人。藤原氏の何某。武門を連れて町家に住み。目貫とやらを家業とし。世の轉變をよそにみて嘲り暮し給ふよし。然るに最前より。貴公の振舞。只人とは思はれず。若左様の御方ならば。主人頼朝數年の懇望。地早々鎌倉へ下向有つて三軍をつかさどり。頼朝が師範となり。士卒の力を助け

給はゞ。詞關東の大小名は蜀に韓信を得たる悦。地又某が面目は蘭相如が使にも勝りたる忠義。偏へに願ひ奉る。フシ頭を。地に付け頼むにぞ。地五斗はつと思ひながらとぼけたる顔付きにて。詞や是は思ひも寄らぬ事。成程拙者も此大津で職人は職人なれども。氏素性の有る者でもなし。もと小相撲も取りしゆゑ。拍子で人も投た物。手のすぢから見ならひ。陰陽師の口眞似。合うた時はふしぎ。合はぬ時はまいす仲間。藤原氏の軍師のとは。お目がねが三五の十八。合ぬしよざいの内からも。地我らが藝は酒吞事。盃の相手なら。いづく迄も参りませう。外の事はお赦しなされ。詞ハレやくたいもない事に隙入れて日がたける。神参りのついでに得意方を廻り。宿へもどつて又。酒々。地お暇申すといひ捨て禮儀もそこゝ立上り。行くを暫しと呼びかけても。耳にも入れず足早に。フシ明きだるかたげ走り行く。地三徳兼備の武士も。世をかざらぬは是非なしと。跡見送りて本田の近經。正數く彼が今井浪人。此大津に隠れ住む目貫師とは思へども。氏を隠せば力なく。残念ながら行く所へ。十三四なる小若衆の。町人めきしそぎ袖におしよぼからげの小りゝ敷。人を尋ぬる目はうろゝ近經に立向ひ。詞コレ申しお侍様此道筋にもしやまゑ。四十計な男の。酒に酔うて行たふれ。地ねてゐる人はなかりしか見給はずやと尋れば。近經胸にこたへ。詞ヲ四十計の酔たんぼ見たともゝ。地そちが尋ねて何用有ると。脇道から間かくれば。詞イエ其人は私がとゞ様。不斷酒が好物で。朝から晩迄酒びたし。きつふ酔うてはたわいなく。地山でも谷でも道なかでも。ねる事がおすき今朝からの神参り。今にお歸りなされぬゆゑ。氣遣さに方々尋ね候と。語るを聞て近經は扱は彼がせがれよな。だましすかして名を聞かんと。ゑがほ作つて聲やさしく。詞ナニ其方が爺親とや。若いに似ぬ親孝行奇特な事と譽そやし。それならそちが爺親は樂人。ハレ羨しい境涯。しよざいはいないか名は何と。地あやかり物ぢや聞たいと。問はれて何のぐわんぜなく。商賈は目貫細工。彫物師の五斗兵衛。私が名は大三郎。ム、スリヤ追分の目貫師か。然らば以前は今井浪人。藤原家で有うがなと。問はれてさうとはいはんとせしが。常々父が氏素性むざといふなといひ付を。爰ぞと思ひかぶりふり。イ、エそんな人

ではなし生れからの職人^{しやくにん}まあそんな事聞^{きこ}ずともとさまのごさる所。地早^{ぢはや}う教^{しやく}て下さりませと。まぎらす詞聞^{ことばきこ}き取つて。扱^{さく}こそと心にうなづき。詞ヲ、父が在所^{すいじよ}教^{しやく}へてくれん。其目實師^{じやくじ}の五斗兵衛は。醉狂^{すいきやう}の上に某へ慮外^{りょがい}を働^{はたら}きたつた今まつ二つにぶちはなした。汝は子の役。地念頃^{ぢねんぎん}に申^{まを}うて得^えさせよと。フシ誠^{まこと}しやかにいつはれば。地大三郎^{ぢださん}は仰天^{おうえん}し。詞何とゝ様を殺したとや。地それは誠^{まこと}か悲しやと。わつと計りにひれふして。フシ前後涙^{なみだ}にくれけるが。地目を押^おぬぐひすつくと立ち。いかれるかんばせ炎^{ほのほ}のごとく。走り寄^よて本田^{ほんだ}がさし添^そ。ぬくより早く親のかたき。覺えたりと切^きかくるを引^ひつばづし。き、胸^{むね}取^とつて膝^{ひざ}に引^ひつ敷^しき。用意^{ようい}の早繩^{はやじゆん}手^てばしかく。猿^{さる}くつわにて聲^{こゑ}をとめ。詞其性根^{しやうけん}を見ようばかり仔細^{しさい}は道々^{みちみち}云聞^{きこ}かさんと。地乗物^{のりもの}引^ひ明^あけ無理無體^{むりむたい}。大三郎^{ださん}をおしこんで。詞コリヤ、家來共^{けらいども}。心入れ有り鎌倉迄^{かまくらまで}三日半^{さんじつはん}にて時付^{ときづ}け。地大事^{だいじ}の召人氣^{めいじんき}を付けよと。口にはいかり心には。詞ム、ム、こうくと。地思案^{しあん}も半ば日も半ば。詞ヘアあの鐘^{かね}は九つでござります。サアいけ。地ヘアかしこまつて候^{こう}と足を早めて。三重^{みへ}へたくましさ。地本田次郎^{ほんだじらう}近經^{きんけい}は夜前^{よまへ}歸國^{きこく}の悦^{よろこ}びとて。家内の賑^{にぎ}ひ取^と分^わて類葉^{るいえふ}他門^{たもん}祝儀^{しゆぎ}の使者^{しや}。フシ門前^{もんぜん}敷^しなみなしにけり。地殊更^{ことさら}今度都^{みやこ}より。誘^{いざな}ひ來^きりし大三郎^{ださん}。頼朝公^{よりともこう}のお耳^{みみ}に達^{たつ}し。梶原父子^{かじはらふじ}答應^{おんこ}の役^{やく}を蒙^{まか}り。未明^{みへい}より執權^{しやくけん}番場^{ばんばう}忠太^{ちゅうた}光景^{みつかげ}。對客^{たいかく}の間^まへ相詰^{あひづ}る。主^{しゅ}は早朝^{そうちう}より。詞登城^{とうじやう}の留守^{くしう}秘共^{ひども}こそぞり寄^よ。詞ナント簀篋^{すせき}どう思^{おも}やる。夕^{ゆふ}べ殿様^{でんさま}連^{れん}てお歸^{かへ}り遊^{あそ}した奥^{おく}のお若衆^{わかしゅ}。見た所^{みとこ}が町人^{ちやうじん}の息子^{むすこ}さうなが。美^{うつく}し生^うれ付^け。お姫様^{ひめさま}と娶^{めと}して。御夫婦^{ごふうふ}になさるゝなら。鎌倉^{かまくら}の歴々^{しきしき}にいくらも有^ある若衆^{わかしゅ}。それを指置^{さしおき}。町人^{ちやうじん}の息子^{むすこ}とは替^かつた殿^{でん}のお物好^{ものこの}。地不審^{ふしん}がはれぬといふに中居^{なかつ}の浦葉^{うは}がさし出^でて。詞ム、野暮^{やぼ}な事^{こと}いやるの。玉世^{たまよ}様の掣^{しやく}君^{きみ}に。丸^{まる}びたいは若輩^{わくはい}過^かる。其上^{そのうへ}早朝^{そうちう}から。梶原^{かじはら}様の御家老^{ごけらう}が御馳走^{ごちそう}にきてござる。あれはの。將軍様^{しやうじんさま}のお小姓^{せうしやう}に。地京^{きやう}から抱^かて來^きたのぢやと。聞^{きこ}て皆々^{みな}コリヤ赦^{ゆる}せ。詞つむるさへ大^{おほ}きい頼朝^{よりちう}様に。地可憂^{かあう}がられたあけくには。底倉^{そくくら}へ湯治^{ゆぢ}て有^あうと。フシと打笑^{うちわら}ふ。フシ折^しから音^{おと}なう。しはぶきは。奥方^{おくかた}の桃園^{ももがは}御前^{ごぜん}。娘玉世^{むすめたまよ}も諸共^{しよども}に。大三郎^{ださん}をさそひ出^でて上座^{じやうざ}へ直^{ただ}し引^ひ下^{くだ}り。しとやかに手^てをつかへ。詞奥^{おく}に計^{はかり}りはお氣^きむす

ぼれん。此館は我君より拜領有りし濱御殿。鎌倉中を見おろせば。風景をも詠め給へ。地御前の故郷は天津とやら。驛路と申す雙紙を見れば。後に三井寺逢坂山。前は水海膳所唐崎。詞近江八景とて景の能い所ぢやげなれど。地又吾妻にも住めば都。イヤなう姫。少おなぐさみに風景を。フシお咄し申しやと有りければ。地アイと玉世は。おもなげに。地あれく見給へ遙向ふの海のおもたなびく。霞堅横にかゝりて見ゆる八丈島。三浦三崎や伊豆の濱。フシ浦賀と云湊あり。こなたは金澤九里の濱。稻村が崎鶴が岡。汐干の景は夫れはその。フシ有つた物ではないぞいな。地ちと濱遊びにいかんすなら。母上諸共お供せん。名物の五色貝。おみやげに拾ろひなされぬか。先づ美しいお若衆は。三下り歌梅の花貝拾ひてしなよく。色貝姫がひ。いとらしいなりふり。かずのかいどり小づまにな。サヨヲさりとほさりとはなうさて。しだれ柳のますを貝。うづらすぐめのかいもよし。すがいやさしやア。フシいたら貝。フシ沖のしほがいにつこりと。笑ふつぼみの青梅も。都若衆につを引いて。ほころびかゝる戀の枝めもとの花に。フシ顯はれし。地大三は一途に近經が。父を討しと心得て。親子が詞耳にも入れず。イヤ申奥方様。親の敵の本田殿。討つて父に手向るより。外のたのしみ何んにもない。地無用の馳走なざるゝな。御用仕舞うて勝負せんと道すがらも云はしやつた。まだ御用は仕舞てないか。早う敵が討ちたいと云も。無念の涙なり。地桃園御前氣の毒と傍近くさし寄つて。詞ほんにマアく其事を。自にこまぐと。お咄し申せと有しをば。外の事に取紛れ。忘れましたは不調法。夫本田の次郎近經。父御を討しといふは跡形もない偽り。親御は去る壽永の戦より。大津の町へ身退き。地春は山路の花を友とし。秋は湖水の月にうそむきたる天命を樂しみて。世の盛衰を見る心ざし。詞將軍是を聞き召れ。何とぞ味方に付よとの御内意。夫本田承り。上京の折から。密に様子を尋ねれども。元より祿食らず。世を誂はぬ英雄なれば。すなほに聞入れの有るまいと。地お前をさそひ立歸り。此譯をお咄し申先御子息の出世を見せ。親御を味方に付けんため。詞頼朝公へも御目見えなされ。主從堅のお盃。地さらりと濟だ其上で。我子の出世を腹立てる親も世界にない習ひ。

ハテ若木さへ合點なりや老木の枝は折れ安い。お歳はいかねど發明なお心にかみ分けて。サア能いお返事を聞きましたいと。詞工みに云ひなば。娘も傍から母親の。其尾に付て。大三様母上のあのやうに。息勢ばつて云はんすはよくよくお前を大切にいとしばがつての事ぢやぞへ。母上計か自らは猶しましくるおいとしさ。早うお返事聞せてとどこやら詞の端々に。色と情をちどりがけはづみ切たる小手鞠の。母の察しも打忘れ大三が返事をフシ聞たがる。地雅けれども大三郎親子が詞にふはとも乗らず。空囂吹て取あはねば座もしらけ。フシたる時しも有れお下りぞふと告ぐる間程なく本田の二郎。白臺に上下地服うやく敷。積重ねさゝげ出で。詞某が本心妻桃園に申付け置たれば。定てお聞候らん。貴殿の御事。頼朝公へ言上せしに。御祝着なゝめならず。所領の儀は。御見えの刻御沙汰有るべし。是は若君頼家卿の御召替。謹で。地拜領あれと白臺を。フシ大三が前に押し直せば。づんと立て身構し。詰寄て本田が顔。恨めしげに打守り。詞敵を討たば腹切覺悟。地小袖貰うて何にせう。御用終らば約束の勝負せん。詞但しは御用をだしにして。敵討を延すのか。お内儀迄同じ様に。目見えいの出世のと。地追従らしい取持顔。此小袖で敵討詔るはさもしひ卑怯な心。詞コレ本田殿。蠅頭で鮒は釣れど。古着て人は釣れぬと。地詞にもんしやもあやもなく。齒に絹きせず云ひちらされ。本田を始め妻娘。何とぬめらん詞もなく口を。フシつむぎて居たりしが。詞それく女房九献でも出し召れ。地娘も共に云付めさ。いきやく。最早料理の時分よし。何として遅ると。料理をしほに大三が機嫌窺ひ。ヨクリ窺ひ立ちにける。地桃園玉世が手づからに。薄茶珍菓を持はこぶ。フシはえぬお髭のちりを取る。地勝手口より番場忠太。懸盤に美味をとゝのへ。御膳めし上らるべしと目八分に指上て。鎌倉風のすり足に膳のすゑぶり敬ひ深く。フシ通ひの座に手をつかへ。詞拙者は。梶原が執權番場忠太。主人は將軍の御用しげく。名代として某隨仕る。御きげんよく。地召上られ下さるべしと。謹でのべければ。出合頭の折悪敷大三郎膝立直し。詞ヤア手を替へ品替へ。卑怯未練な追従輕薄。夫程に命がをしいか。其うへ梶原が取持とは。判官様を謔言したげぢくが家來よ

な。地議者の家來が給仕の膳見るもいまはし穢はしと。足下にぐはらり蹴返せば。桃園玉世はハア〜。フシ肝をひやしてあきれある。短慮の忠太くはつとせきあげ。詞ヒヤ酢の過た小でつちめ物を覚えて此かた。人の給仕杯終にせぬ此忠太。頼朝公の御説意。主人の名代なればこそ。樽ひろひ同然の小舫めに。番場の忠太が給仕配膳。地土足にかけるのみならず。主人梶原をないがしろの雜言。細首はねて舌の根留んと。腰刀に手をかくれば。桃園玉世が引留るをふり放し〜。フシすでにかうよと見えたる所へ。地本田次郎飛出て忠太を引のけ。詞ア、是々鹿忽なり番場殿。雜言は扱置き。すねを持たせても堪忍せいとの御説意を忘れてか。あれまだ。地其十面は何事と制しても。無念々々ときき立つ面色。漸々なだめ大三に向ひ。扇を持つてあをぎ立て〜。詞ホ、ウ天晴いさぎよし大三殿。敵討を詫るかと。我をさみする詞の手強さ。たるまぬ勇氣。ハアさすが五斗殿の胤程有り。生先見えて頼もし〜。地某が本心疑ひはさる事なれども。五斗を討しと偽りしは。頓智を以て本名を名乗らせ。武勇の芽有るやいなやはかり知らん一つの方便。二つには頼朝公御懇望の五斗なれば。御身を君につかへさせ。鑑をおとりに。親鶴を餌飼ひなづけん墜落し。しかのみならず義經公。地御連枝不和に成り給へば五斗殿を軍師にまねき。御催しも有る時は。國家の騷動民の歎き。詞某が詞に付き將軍へ仕へなば。聖經軍術に傳達せし。五斗兵衛實基にてもなどか我子に迷はざらん其後君の御教書を。御身持參有るならば。すげなういなともいはれまじ。さなくとも御舍弟判官殿。いか程頼み給ふ共。子に引かされて味方はせられじ。然れば國家安全なり。地稚くとも道理を辨へて。御連枝和睦のたねとなり我意願も立ててたべ弓矢神を誓ひに立て。鑑を再び肩にかけまい。夫に首を揚げられん。此詞に偽りなし。疑ひはれて將軍へ御仕官頼む大三殿と張子房が韓信に。劍を賣り故事と迄。かぞへ立て言ひならべ。天下の爲に心をくだく。近經は。唐の鑑と世の人の。フシ狂歌によみしも理りなり。地生得明智の大三郎。忠義の詞一々に。聞辨へて感涙し暫しいらへもせざりしが。ずんと立つて席を下り。詞物數ならぬ父の五斗。天下の爲に懇望ある忠臣のお詞に。父の存命承は

り安堵の開胸仕る。親の心はしらね共御連枝和陸の綱にもと。仰もだしがたければ。違背申さん。フシやうはなし。地君の御前を御取成し宜敷。頼み上ますと。一揖して番場に向ひ。忠太様先程の不禮は御免下されいと。地詞を改め手をつかへ。懇懇にのべければ。本田夫婦が悦びはたとへん方なく取譯けて。娘が嬉しさ雙六の。フシ戀目の出でしごとくなり。地近經喜悦の眉をひらき忠太殿には此趣。急いで君へ言上有れ。詞某は大三郎を跡より誘ひ出せせん。寸善尺魔お急ぎ。地然らば左様仕らん。詞大三殿後刻御前で對顔と。フシ番場は急ぎ出て行。詞サア。女房。大三殿に湯をひかせ。髪も衣服も改めさせよ。詞早う。と差圖にまかせ伴ひ。フシ奥へいさみ入る。詞サア。誰か有今日は晴の登城。いつ。よりも歩行馬廻り男すぐつて供させよ。地ハツト答へてかち若黨。そろひ六尺引馬のいな。く聲もはなやかに御所をさしてぞ。三更立かへる。地東路と。フシ都を爰に。追分や。大津八町に隠れなき五斗兵衛が住家には。息子大三が見えぬとて二親の歎きを察し。あたりほとりが云合せかへせ返せの日數も立ち。鉦や太靴の音もくもり。フシ哀れにも亦物すごし。地主五斗は未明より尋に出たる留守の宿。娘の徳女はやさしくも兄が身の上安穩と。幼心に神た。き三社の棚へ燈明を。ともして拂ふ笹の露。フシ打鹽水のしほらしや。地母の關女も奥よりいて不淨を拂ふから手水。清めて共に立願をかけがへもなき男の子。無事に戻して給はれと祈る片手にコレ娘。詞ヲヲよう心が付ました兎角頼むは神佛。今更云ふに及ばねども。大三が實のお袋は。八年以前に大病のやみ死。やもめに成つて五斗どのはあの子の養育。地折に幸ひわしも後家住み。われ鍋にとちぶたと人様が挨拶で。そなたを連子に此家へ嫁入。男の子珍らしき大事にかけて十四五迄。育て上げた大三。連れ合や世間には。日比を知つてござるゆゑ。地云分けも立つべきが未來にござる母ござが。繼しい中ゆゑ鹿末にして。失ひでもしたかなど。草葉のかげから此母を。お恨でも有うかと。それが一倍悲しいと涙ぐめばおとなしく。詞コレか。様。常々おまへが兄様を。大切になさるゝとは。と。様もよう御存じ。殊にあれほど近所のお衆や。と。様迄方々と尋にお出なされた物。つい連まし

てお歸りなされう。地くどく／＼思うて此上に。煩うてばし下さんすな。ほんに日脚も晝近く。皆お歸りを待ちましよと。母に力を次の間へ。フシ泣に立つこそ殊勝なれ。地いか様さうぢや。死んだ物かなんぞのやうに涙こぼすはいま／＼しい。ア、泣くまいぞ泣くまいぞと。いひつゝ案じに胸せかれ。フシどうかこうかの折こそ有れ。地いきせき来るはせき女が兄。捻がねの門八とて所て名うてのいがみ者。門口からどす聲にて。詞くらひどれは内にか。小舅の門八が逢に來たと。地あがり口に大あぐら。コリヤヤイ妹。詞此月のさし入に。去るれき／＼から頼まれ。あつらへて置いた百足猿の目貫。手付の金は先へせしめて目貫を今に渡さぬぞよ。おれが先様へ立ぬはやい。今日の内に是が非でも。埒明にや聞ぬ門八。地どろぼめはどこへうせた。引ずり出してちやつと逢せ。詞コレ兄様。エ、こなたはの。こちは大事のむす子を失ひ。細工所ではないはいの。地主があればど好きな酒さへ一滴も咽を通さず。泣きくらすを笑止がり。他人てさへ御近所から。大勢が手わけをして。返せ／＼の太鍛鉦が。其耳へ入りませぬか。詞こなたの爲にもいはゞ甥御。共々尋にあるいたとて笑ふ者は有るまいぞや。ヤイ爰なそげめ。アノ倅が見えぬとて。おれが何の悲しかる。そんな詮議にやこぬわいやい。地目貫が出来ずば手付を先へ戻せ／＼。詞コレ其金が今時分迄ある物か。大三さへ戻つたらつひ出かしてやりませう。不承ながら待つて下され。テモぬかす事がみなどろぼ。いつ戻ろやらしれぬがき。それがどう待たれる物。地汝にいうては役にたゝぬ。晩に來てくらひどれと。さしむかひに埒明る。詞さうぬかして置あがれ。アタぼこしもない。地すりめにかゝつてすねも雪隠もたまらぬとわめき。ヨクリへちらして歸りけり。跡を眺めて。獨ごと。さりととはむごいど根性。兄と言ふのも穢はしい。義理も情もしらぬやつに。修羅もやそより神々へ。早う吉左右聞くやうの。お頼み申そと立上り。常に夫が神拜を。見習うて打つ拍手に。吐甫加美惠身多女眞實を。フシ神も哀れみ給ふらん。地誠や生智安行の聖人さへ。子のいづくしは離ぬ習ひ。ましていはんや凡夫心軍術に達せしとて。などか我子に。フシ迷はざらん五斗兵衛はし／＼と打しほれたる案じ顔。尋ね歩きしかひもなく。フシ今日もすこ

すご立歸る。詞ヲ、こちの人戻らしやんしたの。まだ在^{たり}かも知れませぬか。地様子はどうぢやと尋ねれば。詞サレバイノ。もしや狐^{きつね}のわざではないかと。稻荷山^{いなりやま}を一ぺんさがし。戻りがけに藤^{ふじ}の森^{もり}。狼谷^{わうこ}から六地藏^{ろくじざう}を。立横十文字に尋ねても。知れさうな手懸^{てがかり}もおじやらぬ。地近所の衆^{しゆう}から便りもないか。どこに迷うて居る事ぞ。いちらしや不便やと涙ぐめば涙ぐみ。こちと女夫が此やうに。泣き暮らすとは露知ず。尋もせぬかと于心に。さぞ恨めしう思ふらめ。地朝晩^{あさぐし}ねがふ御本章^{みほん}三社の神の力にも。叶はぬ事か悲しやと。涙にむせぶないじやくり。フシ夫婦が。悔ぞ道理成地折から表へ笠ふか。只者ならぬ侍の。供をもつれず只獨り。用有げにさしのぞき。詞目貫細工^{めくわいさいく}の彫物師^{ぼりものし}。五斗殿^{いとうでん}の住家は是かと。地綱笠^{じこうかさ}取つて内に入。少詔^{せうみょう}へ度き目貫有つて。堀川の館より泉の三郎。密に推參致したり。フシ御免有れと座に直れば。地心ならねど國主の家老。龜末^{きまつ}にもあしらひ兼ね。詞コレハ御用と有らば。お座敷へ召寄られても仰られず。勿體^{もつたい}なくも御大老の。見苦敷^{みくし}あばらやへ。地冥加^{みやうが}に餘る俄^{にまが}のお成。イザこなたへと。ちり打拂ひ。フシ上座へもうけをなしければ。詞イヤ此方からお頼みの筋。詔^{みょう}へ度しとは目貫片^{めくわい}し。ム、目貫は一對^{つう}の物それに片し頼むとはエ、聞えた。扱は胸亂^{むねご}のこはぜにでもなされますか。イ、ヤ左にあらず。此度主君義經公は。鎌倉の將軍頼朝公と。堀原が讒言^{ざんげん}にて御中不利に成り給ひ。近々に大軍向ふよし。親兄の禮有れば。一先づ都を御開きと勸むれども地罪^{ぢづい}なき御身を落行^{おちぎ}き給は。却^{かへ}つて誤^{あやま}り有るに似たり。思へば弓矢の勇^{ゆう}もなし。所詮^{しよせん}鎌倉の勢を引受け。勝負を一戦に定んと。評議一決^{へうぎいつけつ}に極る所。詞スハ合戦に及ばん時。搦手^{なぐて}を守るさし裏の目貫は有れども肝心の表。追手を守るよき細工の目貫。かたしかけて拙者が難儀^{がなんぎ}。兼て御邊が細工の手きは。地臥龍先生^{ぢふりやう}が肺肝^{はいかん}を出て。子房^{しほう}に並ぶ英才^{えいさい}を聞及べり。あはれ武門に立歸り。さし表の追手を守る。かたしの目貫を請取つて。士卒^{しそ}の力を助けてたべ生々世々の頼ぞと。軍師に頼むとしらけてはいはず。目貫によそへし縫々^{ぬい々}を。思ひがけなき五斗兵衛。兩手を組てさしうつむき只。フシ黙然^{もくぜん}と詞なし。地女房何の氣もつかず。詞どうやら是は六ヶ敷さうな詔^{みょう}へ物。地並大體^{なみだいて}の金では出来まじ。

算用して見さしやんせ。フシ算盤そろばんやろかとうらどへば。地五斗兵衛打うなづき。詞ム、ウ面白き目貫の誂へ。品によつて頼れん。地爰はしちやは端近人目も有り。奥の一間で細工の模様。貴殿の物好み承らん。イザこなたへと立上る。扱は御許容きよう有べきとや。望叶もちひし我大悦。始終しじうの事は一間の内。夜光の珠たまを取得し悦び。思慮湧出しりよくる泉の三郎伴ひヲクリてこそ入にけれ。地女房は一圖づに細工と心得。サア仕合が直つてきた。此きはひに大三も戻らう。首尾はどうぢやと奥の間を。さし視みては立つたりゐたり。耳そば立れば表の方。いつ聞なれぬ轡くわの音。大勢の フシさわく聲。地又人こそと見る内に。十四五成る小人の。上下大小さわやかに。かざり立たる乗馬じようばにまたがり。こちの内を目當に來るは。慥か息子の大三ぢやが。テモよう似たと詠る内。門口に馬乗りはなし。詞コリヤ／＼家來共。用有らば呼べき間さしひかへ待つて居よと。地フシ下部を遙はるかに遠ざける。地横柄わうび成る物ごし迄。聞けばちがはぬこちの兄。さもあれふしきな形かつかう。うかつに詞も懸かられず。内よりそつとさしのぞき。顔合すればノウウかゝ様。詞お久しうござりますと。聲かけられて飛立斗。ソリヤこそ兄の大三で有つたは。ほんにさうぢやと走り寄り。詞其姿はどうしたわけ。地よう戻りやつた息災でと。嬉しき餘り詞さへ。フシしどろになつて問かくる。詞ム、目なれぬ姿御不審は尤。かやうにわたしが出世の譯は。いつぞやとゝ様を。勢田へ尋ねて參つた時。本田の次郎近經殿に出合ひ。無體むたいに東あづまへつれかへり。今では頼朝様に御奉公。それに付きとゝ様へ。將軍様から御狀が參つた地お目にかゝつて見せましたい。奥に休んでござるならさう申して下さりませ。詞ム、それなら出立が立派な筈。地主に見せたら嘸な悦び。イザと手を引き門口を。くどるのれんはうすけれど。恩愛おんあい厚き親の子の。悦び聲を聞付て。五斗は奥より走り出て。ヤア兄よ戻つたか。ヲ、よい侍に成つたなア。親より生れ上りよつた。シタガ。いま嗚へ話しちらと聞いたが。本田といふは彼輩が狂歌によむ。頼朝に過ぎたる物が一つ有る。陪者またりなれど本田近經。其本田が事カナ。さうである。それは夫れぢやが。頼朝様から此とゝへ御狀とは。地ハレ吞込ぬどれ／＼と。いふに大三は懷中くわいちゆうより。うや／＼敷文箱を出し。御用の譯は直筆

にて。委細認め置かれたりと、フシ父が前にさし置けば。地何事かはと封押切り。くり返し／＼讀をはつて押戴き。囁も大三も聞いてくれ。鎌倉から此とゝを。御家來に抱へたい。忤と同道鎌倉へ下り奉公するなら。十萬石の大名にせうと有る御文章。忤い事ではないか。アノこなたを大名にやテモ有難い仰ぢやの。そんならわしは御前様。此子は若殿娘は姫君。地此上の出世はなし。一時も早う取急ぎ。大名に成つて見たい。旅用意さしやれぬか。詞ヲ、それ／＼。是程有難い將軍の仰せ。何のいやと申さう。シタガちつとわけ有て。こちとらは二三日跡から。東へくだらにやならぬ。そちは先へ鎌倉に下り。父母共追付け罷下る筈にて。上意をお請け申せしるし。恐れながら返翰と。返事を君に差上よ。地ドレ紙おこしや書いてやる。フシ硯はどこにと見廻せば。地ハテ二三日の間なら。とても事の大三と一所連立つて下らんせ。詞ハレ何ぢややら様子もしらず。おれ次第にしておきやれと。地しかられて是非もなく。ヲイと言つても神棚の。徳利の口の白紙より外になしぢの鼻紙を。フシ是でよいかとさし出す。詞ウンこな人は草紙紙で書かれる物か。地ヲット心え簞笥の引出し。尺長半分取出し。夫に渡して我子の傍。詞コレ大三。此やうな仕合は寢耳へ水とはいはうやら。たとへやうもない出世。是もひとへにそなたのかけ。地子とは思はぬ氏神と手を合すれば勿體ない。詞皆とゝさまのお陰ゆゑ。地私共迄思はぬ立身。お前も嘸嬉しかろ。詞嬉しい段か餘りで。夢ぢやないかと思はるゝ。いか様ほんに。地人の果報の付く時と。夏の日の夕立は。何時で有うも知れぬと。むつまじげ成る其隙に。五斗は返事書認め。文箱に封印しつかとすゑ。詞コリヤ／＼大三。少しでも隙取れば。君へ對して不忠の至り。地随分道中心をせきはや立歸れと狀箱を。渡すを受取懐申し。然らば私はお先へ下り。お請の様子を我君へ申上げ。此お返事を差上げましよ。囁様跡から。とゝ様や妹と一所にお下りなされませ。詞ホンニ餘りの嬉しさて。妹に逢するのをはつたりと忘れた。地戀しがつたに立ながらちよつと呼でと立上るを。詞ハテ近い内一と所へ寄り集る親兄弟。二日や三日遅いとて。顔の替る事もない。地急げ／＼に力なく。そんならそなたはモウいきやるか。こちらも仕

舞次第（さだ）随分急（いそ）いで追付きましたよ。まめごとと門口迄送り出て。詞こちの息子の大三様のお立。ヤイ家來共。イヤ家來様方。地早お歸りと呼はる聲。フシそりやお立よと詰かくる。詞囁様さらば。地早うお下り待ますと。につこと笑ふ暇（ひま）乞（こ）フシ別れて大三は立歸る。フシ跡見送りて母親が。誰を相手の自慢口。詞ヲ、器量（きりやう）なら骨柄（こつがら）なら。天晴の侍。地若君には恥かしないと内に入り。詞サア五斗腹。油斷する所ぢやない。仕舞事はどうぢやいの。ハテせか／＼とやかましい。夫をぬかる物かやい。マア佛壇（ぶつだん）に火をともしやれ。ヲ、それ／＼。此様に出世するも皆佛神のお陰。お禮の看經（けんぎん）よからうと。地はた／＼悦び佛壇を。としや廻しと押しひめらき。御あかし上る其隙に。五斗は扉（とち）へべつたりと。何やははり出す鉦鼓（しやうこ）に鐘木。頓生菩提佛果聖靈（とんせいぼだいぶつぐわうせいりやう）。南無あみだ／＼。南無阿彌陀。佛迄聞かず女房は。詞コリヤ何ぞ。老先きの有大事の子。死だ者か何ぞの様に。俗名五斗大三菩提（ぼだい）の爲と。アタいま／＼しい念佛はと腹立聲に。フシ涙ぐみ。詞様子しらねは斷りぢやが。鎌倉へかへるやいなや。どうでも大三は死ぬわいた。ヤアそりや又なげにそれ知りながら泊展す無得心。地追かけて呼び返そと。かけ出るをしつかととらへ。詞コリヤ待て仔細をいうて聞かせん。奥に控へし泉三郎。目貫を誂（あつ）へるとは偽り。誠は此度。義經公御兄弟の。御中不和（ふわ）となり。近々に軍始るゆゑ。某を味方に招き。一方を防ぎくれよとお頼み。我古（いにし）へは木曾の浪人。同じ源氏の末ながら。頼朝には仇有（あだ）る家筋先祖の恨（にくしみ）此時と思ひ。義經公の御味方。畏つたと請合し其跡へ忤（こ）が使。鎌倉より我を懇望（こんぼう）いかに忤がためぢやとて。一旦武士の契約。今更違變成るべきか。詞此譯を忤に語らんとは思ひしが。あいつも五斗が亂ぢや物。大事の使を仕損（しとん）ぜしと。切腹するは知れた事。地若木の花がむぎ／＼と。目の前で死ぬるのを。親の身でまじ／＼とどう見物が成る物ぞ。追返さん計に。いつはいいひしを誠と思ひ。いそ／＼として下るべき。將軍の幕下（まくか）に付く事。罷りならぬといふ今の返事。頼朝公へ差上げば。手討に合ふか。其場で切腹との仰。生きては二度展（たび）らぬ盼。地今別れたが一生の。顔の見納め生別れ。死んだと思うてする廻向。ギンおしや不便とばかりにて。さしもの五斗がせきのぼす。胸

に涙のこらへ兼ねわつとばかりに泣きゐたる。地様子を聞て妻の關女。扱悦びと悲しみの。是程早う替る物かさう有うとは夢にもしらず。鎌倉へ下りなば。五斗殿の若殿よ。お世繼様と大勢が。敬ひかしづくあの子の威勢。見る嬉しさはいかならんと。樂みしかひもなく。死るとは情ないそれ知りながらつきはなし獨り戻る侍の道とはいへど餘りぢや。むごいと計りふししづみ正體もなく歎しが。地奥より聞ゆる足音に。五斗は泣顔押ぬぐひ。詞コリヤ／＼女房。未練と泉三郎が。心の嘲り恥かしし。泣くな。地／＼と言つとも。こぼるゝ涙を脇目で拂ひ。フシ座したる所へ。地三郎は仔細聞けども聞かぬ顔。さあらぬ體にあゆみ出で。詞始終奥にて談せし通り。いよ／＼替らず御味方と。主君義經に申聞せ。地すぐに今日迎ひの乗物。拙者が宅迄落付き給へ。後刻ゆる／＼御意得んと。フシ詞すくなに立出れば。詞早御歸りか。稀の御來駕に鹿末のあしらひ。地萬事御用捨てさるべしと。式禮目禮こまやかに。別れて出る門の口。子を持つ人は噓かしと。歎きを汲て泉三郎。ヨクリしはれて我家に歸らるゝ。フシ見送りながら。女房せき女。客の立つ間を待兼ね。無慚さかわいさ不便さを。フシ夫に。すがり溜涙。地あはれいやます五斗兵衛。心に放れぬ我子の身の上。涙ぐみて立たりしが。天性備はる勇者の魂。忽ち心を齟へし。地ハツア迷うたり迷うたり。詞東福寺の聖一國師は。我子の肉を喰ひ大道心を立られし例も有り。出家も武士も義は一つ。地よしなき愚癡に迷ふまじ。都の迎ひも来るべし。用意せんと勇をなし。フシ一間にこそは入りにけれ。地妻は歎きに氣もうろ／＼どうかと案じの最中。約束なりとしたり顔。時分考へ捻がね門入。どろめは内へ戻つたかと。すぐに座敷へのさばり上り。どこにけつかる引ずり出せと。フシ家内をきよろ／＼ねめ廻せば。地小づらにくさのにくて口。詞ヲ、手付を返せなら。アタヤかましい戻して仕舞ふ。もちつとそこに待たしやれと。地立つて行くをコリヤ／＼待て妹。詞もちつと先までない金が俄に有つて戻すとは。ハア、聞えた。たつた今爰の内から。りつばな侍が編笠きて京の方へびつか／＼光る着物をきていかれたが。何ぞ善い事が有つたナ。常からぎす／＼いふと思ひ此門八に隠すのか。アリヤ皆わいらが爲ぢやぞよ。なぜといへ。五斗兵衛

に酒を止させ。細工に精を出さう計り。眞實何のにくからう。親は泣寄りと云事しらぬかい。地よい事なら共々に悦びたい。隠さずと咄して聞かしや。サアどうぢや／＼とたらしこんでも。調我れが心では合點せまいが。そこが親身ぢや。たつた二人の兄弟ぢや。地あはせ／＼と　フシ手をかへ品かへ間落す。地女心のあどなさ兄と思へば心をゆるし。調其心底なら何隠さう今日は大三が戻つて來ての。様子を聞に頼朝様に御奉公。次手に親の五斗殿も。御味方に下れとお使の。地ちつとの違て連合は。義經様へ御味方申し。大三が死ると知りながら噬つて追返したと。言も切らせずナニ。調アノ五斗は都方へ。早味方召されしか。はて扱夫れは。ム、ム、それ／＼其様なめてたい事。聞ずに置いてよい物が。手付の金もへちまも入らぬ。地逢てちよつと悦ばう呼てたもれと打とけ顔。そんなら主を呼びましよと。何心なく立上り。ヨクリへ奥へ呼行く影を見て。地すつくと立つて一間を覗き身づくろい。小陰にひつそと息をつめ。フシ鼻息もせず窺居る。地かくとは知らて五斗兵衛。小舅殿かようこそと。立出るをやりすごし。聲をまかけず後より。まつ二つと切付るを。心えたりとかいくより。ずつと寄て刀をもぎ取り。大げさに切付くれればフシうんとのつけに反かへる。地音に驚き女房娘。何事かはと走り出て。見れば夫の手にかゝり門八が苦痛の體。是はと計りあきれ果。しばし詞もなかりしが。地五斗兵衛は色も變ぜず。調思ひがけなくだまし討にと切かけしは仔細ぞあらん。まつすぐに白狀せよ。様子聞ねば殺されずと。地突飛せばかつばとふし。苦しき息を起直り。調ハア假にも人のつゝしむべきは身に應ぜぬ強欲ぞや。此程本田近經より書狀到來。汝に縁有る五斗兵衛。軍衛に妙有る事頼朝兼て聞し召れ。深く懇望なさる故。勘大三を召捕置いたり若し味方にまねかぬ内。萬一五斗が都方へ一味せば。鎌倉の爲には心腹の愁。早く是を討つてくれよ。一つ廉の侍に取立んとの文章。なんでも儕れ仕畢せんと。百足狼の目貫を誂へ。毎日々々入込しは。事の様子をさぐらん爲。今妹が咄を聞き扱こそと心の悦び。只一討にと思ひしが身の破滅。誰有らう日本の大將頼朝公の目がねに預り。地軍師の器量備はつたる五斗殿。我々風情がそもやそも古今に稀なる武士

の。手にかゝつて死ぬが仕合。詞本望はとげねども。一旦約束した通り志はやつて見る。モウ本田へも義理は立つた。妹や姪が事必お見捨て下さるな。サアいふ事も是迄。地早う此世の暇をたべと。常に替りし今は健氣さ。妹や姪は血筋の別れ。泣きたけれ共夫の心。かねてに違ふ云譚と忍び。スエテ涙にむせかへる。地五斗も袂を。フシしぼりしが。詞ハア、驚入たる御心底、善にもせよ悪にもせよ。人と約せし一言の義を立ぬくが男の魂。地でかされたり／＼とても此深手では。存命思ひも寄らぬ事。某を討んとせしは武士に成り度き初一念。未來閻魔の廳にては。義經公の御内五斗兵衛と引くんで。討死せしと傳へられよ。地我も亦鎌倉より。さほど懇望なされたる御厚恩を報ずる寸志。運つては敗北せば味方の勇士にぬきん出て。一番に討せん。是をみやげに成佛有れ。苦痛させじと引寄て。とどめをさせばはかなくも。フシ覺め行く夢と成りにけり。地親子は死骸に抱付。袖と袖とに聲涙前後。フシ不覺に取亂す。地早表には迎の大勢乗物つらせ入来る。音に五斗は妻子を引立。ヤア悔な泣な返らぬ道。死の縁無量有爲轉變。定めなきこそ世の中と勇め／＼て立出る。關女や徳女が忍ねに。泣聲直に經陀羅に。手向と成れや未來の家土産。寂光淨土の蓮の臺に至り至らん彼岸の。彼岸の花や。入相の鐘を。限に住馴し。大津を出て九重の花の。都へ急ぎ行。

第

三

三下りランドされば吉田の兼好が。つれ／＼草の筆ささみ。色を好まぬむくつけは底なき玉の盃と。書いたは何れ粹坊主兎角浮世は戀と酒呑めやうたへとたはぶれて。春の最中に秋を見る。座敷のフシ内で大踊。地音頭は九郎義經公三味線は靜御前。太鼓は龜井が女房の鶴鷹が役と定められ。錦戸伊達兄弟が。奴仕出しについてふる。姥多き其中に。花染狩衣ふり付けにて。晝夜をわかぬとちてん／＼。すつてんてれつく天井拔。フシ呵手のないさはざなり。地姥共は踊をやめ。詞コレ申し御兄弟様。お前方の手拍子がすつきりとすまたなゆゑ。私らが拍子も合ぬ。ちと氣を付けて踊

らしやんせ。ヤアちよこぎいな女めら。總體踊といふ物はむかふについて踊るが秘密。儕等が不拍子を地我々にぬり付る地横着な引きさがれと。フシあたまごなしにきめ付ければ。地義經公打笑給ひ。詞コリヤ兄弟が尤。素股から本間の拍子はどうでも邪魔に成りそな物。地かりにも我等が御臺所。靜御前の親叔父に。慮外踊の批難。詞隨分二人が踊を見て儕等も素股に踊れ。地けつく慰み／＼と何に付けても御ひいきに。詞ナント見たか。殿様の詞が正直正路といつてもぐつと成りとぬかしてみよ。地相手にすると鰯の。柄ひねくつたるおとなげなさ。靜御前は氣の毒さ聞かぬ顔しておはせども。物にこらへぬ鵜鷹がさし出て。詞殿様の御意成れども。あんな踊に合せうなら。地三味線太鼓もあつらへて不拍子な買ねばならぬ。不自由な踊でござんすのとフシやりこめられて。地むつと赤面。よいか悪いか現の證據。今一度始めてくれう。詞コリヤ面白からうはい。地靜三味線太鼓を鵜鷹。兄弟は隨分と間拍子揃へ一踊。ヨンド詞任せておけるとかけ聲は。そこらで音頭とらしやませソレやつとせい。ヨンドきて見よと。咲きくらべたる花相撲花壇をすぐに土俵入り。行司にすゝむ檜扇のまねき寄せたるよつの方。いせの濱をぎ角びたひなにはのあしのふんで出る。是をきて見よかしのえ。地をどり半に大將は御聲も打とけ給ひ。詞ヤア靜鵜鷹。けふのさわぎに姫中間の立物。花ぞめやかきぎぬが。伊勢音頭の所作踊り。地見残すも残念。フシ所望の御聲に。地靜御前鵜鷹も共に。すゝめ給へば錦戸兄弟。詞ヤア君の仰ちや踊れ。地間の延びぢぢみを直してやらんとフシかさ取るにくさも殿の御意。地花ぞめかりぎぬ辭退なく。支度にかゝれば鵜鷹が太鼓。三味の音色もしづか御前。はやひきいだす。歌人目をつゝむ今のうさ。こはさあやうさおそろしさ。過し初戀君と我しのび逢うた事思ひ出す。秋條の里村烏かわいかわいの聲聞く時は。いとし子の事思ひ出す。地かゝる所へ大鰯の真木ざし。踊の中へはゝかぶり。詞我等もちつくり踊るべい。アリヤ。コリヤ。リヤリヤ。やつとせい。地女中の中を押わりへしわりフシ大手をひろげかきさがせば。地錦戸兄弟目に角立て。詞ヤア命しらずの愚人め踊りの邪魔する曲物の。地首引抜かんと伊達次郎。取付くをしつかととら

へ。調任せておけるともん取りうたせ。ヤこいつもちつくり上手めぢや。次手にこいと錦戸が。地走りかゝるを引つかみ二三間投付くれば。調ソリヤあばれ者怪我すなと。地靜御前に鵜鷹を始め。フシ女中は残らず逃げ入りたり。地兄弟ほうく起上り。調何やつ成れば我君の御前をも憚らず。地はたえ過ぎたる狼藉者。顔を見んと立寄つて。ほゝかぶり引つたければ。龜井六郎重清がにがり切つたる顔付にて。すつくと立つたる有様に。兄弟兼て手並は知る。小氣味わるさにじりくくとヲクリ尻ごみとこそ見えにけれ。地御心にさはれ共。詞をやわらげ義經公。詞ム、心得ぬ六郎が振廻。招かぬ踊に物好姿。地我慰を妨る所存いかにと仰を待たず。調エ、情なや。踊の破れには御心を痛め。天下の破るゝには御目も付かざるか。さいつごろ。鎌倉より仰こされし人質。御渡しなきゆゑ頼朝公の怒つよく。近に大軍責來るとの風聞。萬民の心安からず。地然るに晝夜のわかちもなく。色と酒とに正氣を奪はれますす故。お家にふるき武藏を始め。十一人の御近習。入替り立加はり御諫め申せども。調お傍に仕へる佞人めらが。甘き詞に迷はされ。御聞入なきのみならず。却て御不興蒙つて。皆分國に引きこもる。今にてもスハ。御大事といふ時。君の爲に一命を。露ちりいとはぬ忠臣は。御館に候はず。地此御合點も行かざるは天魔の魅入か淺ましやと。スエテ涙を。こぼし諫むれば。調ヤアこしやく成る六郎汝燕雀の分として。大鳥の心いかで知らん。一旦互に和睦をなし。地心とけたる兄頼朝。何しに胸を變じ給はん。調ハツア愚か成る君の仰。梶原平三景時が様々の讒言。殊更。權ノ頭が請合し人質靜御前。君御得心ましますさねば御舎兄も又契約を。何とて守り。フシ給ふべき。地只今にもあれ人質を鎌倉へくだし御憤をしづめ給はゞ。天下は自然とおだやかならん。最前より我君に逆ふとは知りながら。申上ぐるも國家の爲。是非靜殿を敵に渡し。早々佞人を遠ざけて忠臣を招き寄せ。お家長久の基とし臣等をめぐみ。フシ給はれと。縁かへしく。諫言したる若者は。十九歳にて討死せし義經公の御内に。四天王と名を得たる。フシ其一人の勇士なり。地氣ばやの大將御氣色變り。調ヤア諫めに入るゝは家來の役と。宥免すれば付け上り。佞人に迷ふとは存外千

萬。定めて錦戸兄弟が事ならん。威勢を妬む讒言にて。佞人とは儕が事罷立て。重ねて目通りへかなはぬと。地以の外の不機嫌にて御座を立んと仕給ひしを。驚き御裾にすがり付き。調情なき御錠御通りへ叶はねば切腹するより外はなし。たとへ御手に懸ればとて。申しかけたる我諫言。地露計り開入れ給はゞ。何か命の惜からんとひたすら諫むる一圖の忠義。返答もなく立蹴に蹴やり。詞イザ兄弟奥へこよ。地一獻汲まんと給ひて。フシ御座の。一間へ入給へば。地龜井は餘りに興さめて。しばしイミ詠める。地錦戸伊達はあざ笑ひ。詞ア、辨へなく出るまゝのほゝげた。佞人の悪人のと。人をそねむ報にて。君の不興を蒙りながら。のめ／＼生きてはゐられまい。地恥を知らば切腹せよ。兄弟是にて見物せんと。さもなく體成る一言に。こたへ兼てくはつとねめ付け。詞ヤア儕等が性根にたくらべ。威勢をうらやむ讒言とは。奇怪成るあごた骨。地引さいてくれんずと飛かゝらんとする所へ。ヤレ待給へ龜井殿。いふ事有りと泉三郎。しづ／＼と立出れば。さしも血氣の六郎が老の詞に免じ。残念ながら猶豫の體。其間に近く歩み寄り。詞六郎申し。若うござるよ。御意見が一圖なゆゑ却つて御前に聞入れないは。君が踊りを好み給ふゆゑ。錦戸伊達の御兄弟。よい年してさへやつこ踊。其元もなせ踊り給はぬ。御自分が其かたくろしい心ゆゑ。きむら／＼と浮名を取るは。ア、若氣ゆゑハ、、、。たしなみ召れと。地兄弟が耳に釘さす詞に龜井は猶せき立ち。詞イヤサ御自分まで踊れとは。踊が國家の御爲に。成るとも／＼。もゆる火をけさんとして水をかくれば猶さか立つ。さかん成る火を納るには。又火を以て消す道理。ナ爰を能く得心有れ。さるによつて某も。御前にて一踊り致さんと存れども。君の音頭は古風なゆゑ。道念ぶしのへん盡がよからうと思ひ付き日本一の音頭取り。五斗兵衛を同道致した。此音頭で踊る時は。いか程大きな踊でも隊伍を亂さず一致して。進退かけ引き心の儘。追付けは来るべし。君に此事申し上げ。地はやし方の手配せん。其元は貴宅にかへり。踊の用意あらまほし。御前は拙者に任せられよ。智勇をかねし三郎が。教へに龜井も胸落付き。詞ハア驚き入つたる踊のさいばい。音頭取の物好き迄承つて安堵せり。地萬事貴公に任せ

置くと立上りしが兄弟を。にくしとや思ひけんふり返つて兩人を。ぐつとねめたる目付のこはさ。見ぬ顔すれば六郎も我家へヨクリへこそは立歸れ。地泉三郎跡見送り。ア、頼もしき若者と。心に深く感じながら。兄弟が前を摺抜て。挨拶もなく義經の。フシ御座の一間に入りに入り。地跡に兄弟鼻つき合。詞コレ兄者人。權ノ頭を始め。忠義達するやつ原大かたに押し込め。残つた泉と龜井めがけむたなくてはならんだに。先づ一人は半片付け。序に泉三郎めも。押込める思案はないか。有るとも。きやつが今いふ五斗兵衛。根が目貫の細工人。生れ付いての底ぬけ上戸。酒をくらへば亂れ出し。一斗が二斗三斗限りもなき底ぬけゆゑ。誰がいふとなく五斗兵衛。本性を失ひ何の役に立ぬやつ。それを見込て一つの方便。五斗めがうせたる時。目見えせぬ内酒をくらはせ。地馬鹿つくすを越度にして。きやつは勿論三郎めも。ざんげざぶらに云ちらし。追まわつて仕まうたら。うつそりの大將は立うと伏うと我々次第。必ずぬかるな弟と。人をそこなふわるだくみ。コリヤ上々の御分別。氣遣有るな拙者に諸事をお任せと打連れヨクリ奥へ入にける。地暫く有つて五斗兵衛。二度花咲く會稽の錦にあらぬ出立ばえ。木綿どてらに廊上下。藤卷柄の大小を。さすが名高き軍師とは。見すばらしげに見ゆれども細瑾を顧ぬ大丈夫。笑ふもそしるもなんともなく。フシ御座の間近く入り来る。地伊達次郎出迎ひ。詞ヤ珍らしや五斗殿。先達て承はれば改め御名を聞くには及ず。手前は伊達次郎と申者。萬事貴公の御引廻しに預りたし。コレハ結構な御挨拶でござります。新參の某諸事此方からお頼み。サアお手を上らしい。扱もお堅い事では有ぞ。サ、いざと。地互に禮儀。フシをなす所へ。銚子盃。地携へて地秘頭澤田が立出で。錦戸様のおつしやりますは。是は御前のお盃。どう成りとういやうに遊ばせとの御口上。ム、我君のおながれか。イヤサこれ五斗殿。御邊が酒を好まるゝと聞し召。義經公よりお盃。地ナント一つ參らぬかと差付けば。焼石の飛付程に思ひしがちやくと思案し。ア、いやで候こりて候。まだお目見えも済まぬ内。先づよしに仕らう。ハテそれは氣の毒。達てとは申されぬが。すいた物を吞まぬといふは。ア其元に似合ぬ愚癡の至り。地しかも此酒は

隅田川の諸伯。油のやうで和らかな我等が仕合たべませうと。盃取つて一ぱいつぎ。ぐつと吞ば咽きつくり。羨しげ
成る顔付に。又盃に丁ど受け。詞コレ此かざをかゞつしやれ。ドレ／＼。ム、ウ甘くさい／＼。地序に爰へと口もと
へつき付くれげ。獵師のわなにかゝる狐の油揚。いつそ儘よとずる／＼。詞エコリヤたまらぬ。地序に最一つお
さへも給う。イヤなんぼ成りとも聞しめせと銃子渡せば押取つて。ついでに吞み／＼。詞いやはやどうも申されぬ。
結構な御馳走と。地そろ／＼。亂るゝ舌あんなばい。してやつたりと伊達次郎。何思ひけん挨拶なく。フシ一間の内へ蹠
入たり。詞是はどうぢや。盃の埒も明けず。亭主がはづして座敷は濟ぬ。地どこへ／＼と見廻す内。五斗兵衛に對面
と。大將九郎義經公直垂に打鳥帽子。泉三郎先に立ち御廣書院に出給へば。引續いて錦戸兄弟フシ威儀を繕ひ座に直
る。地五斗兵衛はじろりと打守り。詞コレハ皆様ようこそお出なされましたなめ。コリヤかゝよ。ソレたばこ盆。
地ヤレ釜の下も焼付けよと。我家と心え馳走ぶり。泉はハット仰天し。扱は錦戸兄弟が酒をもりしに極つたりと。悟
りながらも此場の難儀。シツ／＼と鼠を追ふ如く。目顔で知らせどしろりくはん。義經遙に見下し給ひ。三郎が進
めし軍師。五斗とは彼が事な。いにしへ。漢の韓信を高祖始て見し時。得たる諸醫を尋給ふ。地其例有れば尋て見
ん。ソレ／＼兄弟聞いて見よと。仰に出しやばる錦戸太郎。詞コレ／＼五斗殿。六韜三略を暗んぜしか。明白に述聞
かされよ。エナンジャ六韜三略。我等すつきり存ぜぬてゑすは。ナンジャ知らぬ。ホイ。見事な軍師の。然らば武藝は。
武藝か。コリヤ又武士の表道具てゑす。先づと。弓鎧鐵炮馬乘事。劍術體術ひつくるめ。すつきりと知らぬてゑすは。
ナントきついものか。先づ一體根がきらひてゑす。知らぬてゑす。右の通りの仕合ゆゑ。何をさせても埒明ぬてゑす
はい。地兎角好きなのはコレ／＼と。又引かゝへ呑む酒を。手に汗にぎる泉三郎。フシ胸をいためる計りなり。地大將
齒だ立腹まし。詞かゝる浮世のすだれ人。我にすゝめし三郎が心底こそいぶかしさよ。ハア御尤の仰ながら。昔
より言傳へる智者の一つ失とは此事。醉さめて後。軍術の奥義を尋ね見給へと。地いひも切らせず御色替り。詞コハ

心得ぬ一言。スハ一大事の場所に成つて。五斗が酒に亂れしとて。正氣に成る迄待つべしと。敵が軍を延すべきか。地言語にたえたる龜忽の言分。此義經を嘲るのか。軍師とは思ひも密ず。アレ引出せと怒の面色。重ねて何の御説もなく。座を立ち奥へ入給ふはフシにがく敷ぞ見えにける。地錦戸兄弟多つぽに入り。詞アノやうな極道を。軍師ちやの音頭取りのと。目利なされたお方が見事。地よう合點の行く様に誰か有るアノ生酔め。たき出してお目にかけよとフシ言捨て一間へ入りければ。地下知に下部がはしたなくたき出せの人音を。泉の三郎聞かぬふり。たとへいか程働く共きやつらが手に合ふ五斗にあらず。萬事の思案は館でこそ。エ、につくきやつは兄弟なれど。愚人を相手に隙づいやし。無益の論と誤りを。フシ身に引受けて歸るゝ。地程なく出る雜人原。手々により棒引かたげ。しどろもどろにかかり出し。詞あんたはいな酔だふれ。軍師とは事をかしい。道理かな元が職人。商賣が目貫師ゆゑ人の目迄ぬきくさる。地意見の爲にどこもかも。たきゆがめて追まくれと立寄をどこへ。詞御馳走のより棒酒が下地が充滿。モウ望ないでゑすは。ナ扱と。貴様方がしかるによつて。是からは軍者をやめ。元の目貫を仕るぢや。ほしくば一對おまそかな。コリヤ談合がおもしろい。眞實にくれる氣か。やるともくぶつてさへ下されねばいくらでも易い事。シタガ。目貫も品々有り。とてもものに値段付で細工のもやうを語つて聞かせう。どれ成りともお氣になされ。舞ガ、リ先づ富貴成る牡丹の花に。たはむれ遊ぶ。獸は。地大かた四々の十六文。月に兎は子持の證據さんごをかけて十五貫。猫はにしが。八百匁。狸は金で百疋なり。つなぎ馬は相場もなくつたむしやうに太こ付。猿は三十三貫三百三十三文なり。道具カ、リ紋づくしなら桐のとう。五七兩から五三兩。毛彫は。かゝが重寶で。お望なれば。三百匁。其外家の三番三。お望次第好次第とフシ口に任せて云立る。詞ハレヤレくくどれもたかい目貫の。とてももらはと三番三。くれる事は成まいか。成るともく地どれやろと。フシ鼻紙袋取出し。地中を拂うてあたまたにすつぽり。かづけ物ではござらぬぞ。イデ三番髪が所望なら。詞何より以て安う候。地さあらば一つ參らせん

と拍子をふんで。詞ヤアヲンハ。地はづむ拍子に下部もつかれ。鴈とびやら横とびやら。うつゝぬかして付けまはすを。エイエイと地つきとばし足に任せて。三重立歸る。地請繼し武門の榮えきらめきて。庭の本草の落葉かく座敷廻りのはき掃除。箒片手にはやり歌實も泉ノ三郎が。館と知れて勇まし。女子仲間のべりく頭。お鈴は何がな鈴ふりに。詞コレ我身達。此間から御座敷へ女夫に娘三人連れ。五斗とやら八斗とやら。へちまのやうな浪人衆。お客く々と大事にかけ。めつたむしやうに御馳走なさるゝ。どうでも譯の有りさうな事。地みんなは何も聞やらぬかと尋ねれば。口ばしの長い鶴野が羽繕ひ。何いやるやらどこにあれが浪人衆。もとは目貫の彫物師。兵法や軍法が上手なゆゑ。大將に成るといの。しかも今日は目見えとて。旦那様と御同道。それ程軍が功者なら人の見ぬ間の夜軍も。大體の事では有まい。詞ナントさうは思やらぬか。なんのいの。目貫師なら高がした。お内儀の穴彫のと。馬事するは上手であるが。地本の馬に打乗て切合ひは覺束ないと。遠慮會釋もかげ言の仇口々ぞやまし。地をりから奥より泉が妻。育ちもかたき岩浪が。障子開いてあゆみ出で。詞コレハさがなし聞きにくい。尤是迄職人にて。大津の里にお住居なれども。根が木曾殿の御浪人。氏といひ武藝といひ。唐土の張良にも劣らぬ武士を抱へたとて。連合の悦び。義經様の御爲には。旱天に雨を得たる心。地様子も知らいて見苦しいかげ言。おかもじや娘御の耳へ入つてはこちとらが。共々にもそしるかとさげしまるゝが恥しい。詞重ねてをたしなめと。地いつなき詞の張合よく。フシ關女は娘を伴ひて。何心なく奥より出て氣の毒顔に是はしたり。詞どういふ事で奥様の御きげんがそこねしぞ。少々誤りなら。慮外ながら。私共に免じての御了簡。常から結構なお方能々のお腹立。アイ誤つた申してござります。御堪忍遊ばせと受つ答へつ追従ませり。我身の上の噂とは。しすまし顔に詫口上。フシ傍で聞さへ笑止なり。地岩浪いと迷惑さ。コリヤ皆の者。けふはあなたの御挨拶。了簡するぞ勝手へ立てと。地云ふに幸ひをかしさを。怵へ兼ねたる下女はした。フシ吹出しながら走入る。地娘は母の袖を引き。とゞ様は何方へのお出まだお歸りもな

ささうな。待兼ますると尋ぬれば。詞ヲ、わけを咄して聞さぬゆゑ案じるは尤。イヤ申し奥様。かやうに申せば夫の事を申すやうでわるけれど。七八年も連添うて。萬事に心を付けますれど。大酒呑てたはひのないのと。目貫を上手に彫るより外の。藝は何にもない人。地軍師とやらになさるゝとて三郎様がいかひお世話。仕付けぬ事を致されたら。詞明けても暮てもしぞこないだらけ。終おあいそも盡うかと私か案じ過し。地御推量下さりませ。殊に今日は御目見えに早々から御同道。どうぞ首尾よう埒明て。有付れたらよござりましよと。いへば岩浪多しやくして。詞は扱卑下をしての御挨拶は尤ぢやが。お氣遣遊ばすな。夫泉の三郎も堀川の御館では。隠れもない武士。地つひに是迄そさうを云はず。しめくゝりがよいゆる。ありや眞田の平打紐。アノ人の云ふ事なりや。六文銭をにぎつた様など。人の噂に乗る程な堅侍。地見込がなうて世話やく物か。目がねに違はず御立身さりと首尾してお歸りなさりよ。御不自由なは今少し。御辛抱遊ばせと。フシ奥底もなきねんごろに。詞なう娘今のを聞きやつたか。いかい御苦勞かけるぢやないか。地誠にさうと親と子が悦び勇む折も折殿様のお歸りと。下部がフシ呼はる聲につれ。地いつに替りて泉ノ三郎。疊ざはりも荒けなく不興顔にて立歸れば。只ならぬ體氣遣ひさ。やお下りか我夫と。女房が會釋に返答なく。すつと上座へ坐したる有様。小氣味わるさに五斗が妻。娘をそつと引立て。物をも云ず岩浪が。フシかげへくゞまり居たりける。地三郎はつと溜息つき。詞ハツア誠や。智者の一失とて。古語に違ぬ一つの疵。古今不雙の侍なれども。酒といふ大病には。扁鵲が藥も叶はず。情なや五斗殿錦戸伊達が計略にのせられ。いつの間に吞まれしぞ又例の大酒。どろつぺきに成り御目見え何をお問ひなされても。存ぜぬ知らぬとたはいのたらふ。地御前の首尾は散々にて。有りつきは扱置き。雖人原にたゞき出され。見苦しき振舞。詞今日迄人に笑はれぬ某も盲同然のそしりを受け。地面目を失ひしと語れば驚く泉が妻五斗が妻子も仰天し。フシあきれ果たる計なり。地岩浪さわぐ胸をなておろし。夫は氣の毒さりながら好でなされし誤りならず。詞よしなき人の世話やいて。骨折ぞんぢやと思ひながし。深う

御氣もじなさるゝな。いか様元は侍のはしくれても有つたげなが。浪人してからさもしい暮し。詞本ほんに氏より育とて。心迄がいやしう成り。地役に立たぬ人間にとやかう胸を痛めずと奥へいて少ちとお休みと。心を付ければ泉三郎。實に草臥しと立上るを。五斗が女房傍へ寄り。詞シて其夫は何方になぜ連立ては下さりませぬ。ア、サレバ。同道にて歸らんと致したれども酔つぶれて正體なきゆゑ跡に其儘捨置しが。定めて追付歸りめされう引とらへて意見をめされ地近頃笑止やうし千萬と。思案を胸にこめながら。詞ずくなに不興して夫婦はヨクリ連立ち入にける。地跡に親子が顔見合せ。泣くも泣かれぬ夫が噂とやせんかくやと物思ひ。フシ案じ煩ふ折こそあれ。地五斗兵衛は熟醉じよくさんに。箒ほうきの先へ二升樽くゝり付けたる足元は。漂ふ船のひよろ。フシしどけなりふり浮れ聲。エイ。エイ此さんさ。池のはた成るどう龜が獨りは穴へこそ。ヨイつぽにぽ。ヨイつぽにぽ。づんぽづんぽ友を呼候。つぽにぽに。づぽにぽ。へ岡崎女郎衆。へ。岡崎女郎衆はつぽにぽ。アラ面白のつぽにぽ。詞ハ、ア呑だのんだ。あてほうめがせうがの様な手を出して。一拳けんしよ。とぬかした。おれも又いかひたわけ者ぢや。そんならしようかて。一つけんとなちきすとなと負けてのけた。とかく酒でなければ夜が明けぬ。酒は愁うれひの箒といへば。ほうきにのんだといふ心で。かやうに出たち候ぞや。ハ、ハ、ハ、無理か。へ。無理でなか。地さらば座敷へ参らうと。一間へ通りこわ作り詞誰ぞあるか。お客罷戻たぞ。ヤアゑい。やつとこなの地相伴しどうはんせうと。又引かかへ呑む有様。女房見かね走り。詞コレ五斗殿。マア時も時折も折。一世一度の出世の場所。棒だら。イヤ喰ひだをれと名を立てられ。地無念にはないがいのふ。くやしうは思はずかと。せりかくれば。詞コリヤ女房。無念なぢやによつてたべたぢやてナ。サイなう。其たべたゆゑに引出され。地赤恥あかはぢをかいたではないかいなう。詞ソリヤ誰が。ハテこなたが。ハレやくたいもない事を。詞ソリヤ祐成すけなりて御ざる。なじよに虎と祝言しうげんの盃はさしやました。御前で伊達兄弟がいかにひもてなし。いんで休めて、引出された。ナ娘よきついぞ。あすから我を馬にのせて。鼻かを乗物にのせて。我が鼻かぢやてに。ナ。祝ひ

事に又いたそと。地樽かたむくれば。女房興さめもぎ取つて涙を浮め。詞エ、淺ましい。口はそれ程かはいひか。地恥を恥共思はぬ生醉。さほどにある共思はずに。娘を連れてよめりし此かた。五年餘りの辛抱。又しても呑過してのしぞこなひ。ほつとあいそもつき果た。こなたが何の以前が武士。竹のふしか木のふしか鯉ぶしでもあるまいと。恥づらかゝせどきよろりが味噌。詞コリヤ出かした。ふし盡しどうもいへぬ。とてもものに小歌ぶしで。一ぱいしかけう。サワギ歌備前岡山新太郎様が。江戸へござらは雨風あられ。雨ちやござらぬ新太郎様の。戀の涙がヤレコリヤ雨と成る雨となるよりおれは酒と成がよい。コリヤきやらめ。あいしをらぬか。地おさへると。しなだれかゝるを取つてつきのけひつしよなく。詞エ、こなたはの。とても其根性で。女房子の面倒を見届る事は成まい。よいかげんに際おこしや。地去狀書かそと床の間の。硯取る手もこらしめと。思へどつよき詞の角。娘は悲しく申しと様。詞今からふつつり思ひ切り。酒吞ぬと云うてたべ。地拜みまするとゆりおこし。歎く間に硯をつき付。此後酒をとまる氣か。それがいやなら去狀を。書ておこしやと引起せば。詞マア／＼よいはい。せはしない者ぢや。我が其やうにつれない事いふけれど。おれは我れがかはいひて。晝も涙夜も涙。泣ぬ日とは一日片時もなはいな。詞エ、其あだ口もきゝあいた。地去狀早うとせり立てられ。詞夫程はしか書いてやる。跡で必ず悔むなよ。ヲ、置てたも。悔みやせぬ。ホ、きつふ張がつよいな。それもおれが合點ぢや。女のなづむ風俗の。よい殿御を詞調うと思つて。地そんならどれと硯引寄せ。お定りの三行半。詞ナ望の文言是てよいか。シタガ五斗が隙やるのにたゞやつては分が立ぬ。コレハこれ。重代の腰の物。青江下坂。百三十二文で貰つたけれど。暇の印に持つて行けと。九寸五分を投出し。六分ないかと又ころり。地寝るより早く高いびき。ヲ前後も知らず伏しにけり。地娘は頭是も涙にくれ。おろ／＼するをコレハしたり。是は母がこらしめ。意見の爲に取る暇。目が覺たら常の通り。やつぱり替らぬ女夫の中。泣く事ないと娘をすかし。間の襖を引明て。出んとするを岩浪が。お内儀待つたりと走り出て。詞此生醉を残し置き。そなた紫計

り歸るとはさう甘うは成りますまい。地お連合も引起し連ていんでもらひましょと。呼びとめられて五斗が女房。むしやくしや腹にどつかと坐し。詞コレ奥様。イヤ泉三郎のおかもじ。こちの男が酒呑の。たはいなしと云ふ事は最前から知れて有る。夫を爰の御亭主が目も明かぬ形をして。見込の有るの取次のと。めつたむしやうにそゝり上げ。住みなれた大津の里身代をたゝませて。今ではどこも居所のないやうにして貰ふ忝うてたまりませぬ。それに何ぢや。こちの夫はしめくゝりがよい故。泉ノ三郎とは人がいはぬ。さなだく。さなだ紐の。イヤ六文銭のと自慢たらんく。地是がどこにしめくゝり。ひよんなお人に見込れてこちとらが迷惑。あげくの果に縁切れて去られたら他人むき。構けふ理窟はないはず。酔だふれはあたまから呑込んでのお世話。やつかい序にどうなと御勝手。アタ面倒なと出はうだと言ひたい事を言ひ破り。サアこい娘と引立て。次の一間へひつしよなく。氣強く出るは出たれども心もとなき氣遣さ。フシ暫し小かげにたたずめり。フシ胸はせきくる。岩浪も。五斗が妻に言ひこめられ。齒がみをなしてゐたりしが。よし／＼是からこちも意地。生酔を引出し諸人に顔をさらしてやろと。やら腹立に立かゝり。詞テモ熟柿くさい。地是程にのまいではと兩足取つて引ずれども。女の力に叶はばこそ。詞ヤ家來共早うこい。地此生酔たゝき出せと叫ばれ。詞ヤレ待て女房。用事有りと聲をかけ。地鐵炮引さげ泉三郎。フシ一間の内より立出て。詞唐土の劉河間。は。四百餘州に並びなき。博識多才の名醫なれ共。酒を好が一つのきず。五斗が酒を好めるも。是にひとしき疵の内。地さのみ武勇の疵にも成るまじ。古今に秀し猛勇とにらみ付たる我眼力。見損じたるか試せん。そこ立退と追退追退。火ぶたを切つてねらひもなく。どうどはなすから鐵炮。ひときに五斗はむつくと起。詞ア、ラぎやう／＼や。今打ちし鐵炮は。陰にはなれ陽にはづれ。筒に音有つて向ふに音なし。扱は玉なきから鐵炮。地何者の仕業ぞと四方をきつとねめ廻し。勢替つて立たる有様。實に諺に言傳ふ心がけ有る侍は。響の音に目を覺す。フシたとへを引くも愚なり。地扱こそと泉ノ三郎。すかさず寄ていかに五斗。詞今ひときたる鐵炮の。五音の調子はいか／＼ヲ、尤

の御尋。乾坤二つの間をぬけ。不吉の調子離の中斷。中斷とは中をたつ地御兄弟の御中も。識者の爲に斷かれて。鎌倉の怒りつよく大軍追付け責来らん。油斷する所てなし。詞ホ、左ほどの御邊が何ゆゑに。錦戸伊達が。計略に乗られて。大酒に正氣は亂れしぞ。イヤサ。病と知つて盛酒を。吞まず却つて世にへつらひ。祿をむさぼる輩といはれん。地名利に放れし此五斗。いかで愚人の心を背かん。詞一つは又。主君の心引見ための事成るぞや。ハツア頼もしく忝し。地然らば以前に頼みしごとく。一方ふせぎ給はるべきや。詞ハア御念に及ばず兼ての契約。地君の心はうすくとも。貴殿の忠義厚きにめんど。いかで。違背の有べきぞ。軍の用意イザお出。御尤と兩人はフシ勇んで一間にかけ入つたり。地岩浪は二度びつくり。テモ扱も天晴の侍。目利した夫も夫。揃ひに揃ひ弓取やと悦ぶ櫓のあなたには五斗が妻も興さめ顔。かほど功有る武士と。知らで暮せし。フシくやしやと。前非を悔む去狀に。今さら何といひやらん。仰なければ思案して。ヨクリ櫓をへ押明おづくと。フシ娘が手を引き。差足に。歩む疊の目に涙。つむ心の恥かしさ何といひ寄る詞さへ。俄に作る輕薄笑。詞ホ、へ、へ、へ、まあわたくしとした事が。七八年も連添て。あのやうに武藝の有る男とは。夢さんぼう知つたら何の暇を取りませう。ひよつとした腹立まぎれ。ア、はお内儀やかましい。とつとゝいんで貰ひませう。アイ。お腹の立つは御尤ながら。地行所もない身の上。常は何程結構でも。退くの去るのというた跡。直に詫も致しにくい。慮外ながら詞を添られ。中直して下さりませと手をつかゆれば突退て。詞コレ女中。きついこなたは千枚ばり。めん／＼が勝手づく。無理に取つた暇ぢやないか。いかにアノ五斗殿が。今ぞ誠の武勇をあらはし。一方の大將を請取。出世の身に成給へばとて。一旦暇を取つた身が。又添ひたいとはどの顔で。殊に最前いはれし通り。こちの夫泉の三郎は。目の明かぬひよんな男。地其女房に説言を。お頼みは御無用と。持つて參つたあたり口。さうおつしやると私は。爰て穴へもはいりたい。とにかく慈悲の神々の。御罰を請る法も有れ眞實縁を切る心で。書かせて取つた去狀ならず。詞こらしめに意見の爲。其譯をようおつしやつ

て。夫の得心有るやうに。お託を頼む奥様。地コレ手を合せて拜みますと。スエテ涙をこぼし頼むにぞ。地傍に娘は聞づらく。こたへ兼しか。最前に。五斗兵衛が渡したる暇の印の相口を。抜くより早く我と我。膽のたばねを一そぐり。ナフ悲しやと母親が。あわてふためき取付けば。岩浪も仰天し。何ゆゑの自害ぞとフシをいろ驚く其ひまに。地こなたをひらき泉ノ三郎。縋縋の鎧眞垂。あなたの一間は五斗兵衛。紫裾濃の割小札。小手胸當もフシ花やかに。金の采銀のざい。打振／＼出立て。床凡にかゝりし二人が形相フシめざましくも又いさぎよし。地手負は苦しき息の下。父を見上見おろして。嬉しき中に涙ぐみ。詞へエ、淺ましいは母様。地いかに是迄世渡りの。貧き煙に苦しみて。見苦數く暮せしとて。なぜそれ程に心迄。さもしくは成り給ひしぞ。詞たつた今迄父上を。もつたいたなくも畜生の。喰どれのとにくて口。お前はようもいはれしぞ。地吾妻にござる兄様の。お耳へ入つたらさぞ腹立。其上無體に去狀書せ。望んで暇を取し身が。御出世の姿を見て。又添ひたいとの託言を。詞聞入なき奥様を頼み。見苦しい追従の有りたけ。今では本のかゝ様より。他人のとゝ様がいとしい。託する手間でさつぱりと。なぜに死んで下されぬ。わしやあんまりの恥かしさに。お前の替りに死まする。地先達つ不孝は赦してたべ。申しとゝ様。母さまとは縁切れよ共。私はやつぱりおまへの子。娘と言うて下さんせ。おもひ出しては折々の。御回向頼み上まする。是はばかりが此世の願ひ。もう物いはして下さるな。苦しいわいのと計りにてフシもだへ。歎くぞ哀れなる。地聞くにせき女は氣も狂亂。よい手な事を言譯に。するやうでわるけれども。詞わしも五斗兵衛が妻。恥を知らいて何とせう。最前託をせぬ内に。自害せうとは思ひしが。地跡でそなたがみなし子の。流浪せんかと心の案じ。顔押ぬぐうて叶はぬ託。いつそ其時死んだなら。今此うきめは見まい物。思ひ過しが結句仇。堪忍しやと伏しづみ正體。一シ涙にむせかへる。地五斗も目に持涙をはらひ。詞誠や聖人は有智の小兒。小兒は無智の聖人と。言傳へしに違ひなく。まだ十三四の小兒同然。殊更すなほに生れしゆゑ。親の未練を面目ないと。おもひ詰てけなげの最期。地不孝ではない大孝行。やつぱり子にし

て下されとは。ヲ、よういふたなア。フシ嬉しいぞよ。地未來永々大事の我子。心の迷ひ打晴れて。成佛せよと跡いひさし。合掌せねど口には稱名。胸迄ぐつぐつと突のぼす。涙を見せじ。知らせじとこたゆる心の三郎夫婦。推量しての貫泣袂を。フシしぼる計りなり。地今はの徳女は目をひらき。詞其お詞を聞いたれば。もはや浮世に望みなし。と、様さらば。かゝ様さらば。地兄様にもようこゝろえ。御息災でと傳へてたべ。詞三郎様御夫婦。是迄はいかいお世話。モウお暇を申します。地名残をしやと計りにて。刀を抜けば玉の緒の切れて此世をフシ去りけらし。地わつと計りに母親は。死骸にひつしと抱き付フシ前後。泣入るたりしが。地とても娘がさげしきは百千萬の言譯も。此世ではかひ有るまじ。我も共にと相口に。取付くを泉ノ三郎飛びかゝつてしつかと押へ。詞娘への言譯に。自害せんとは何事。徳女計りが御身の子で。兄の大三は子ならずや。死すべき命をながらへて。ナ。東に下り首尾能う奪ひ立歸り。五斗殿に手渡しあらば。夫へ立つる心の操。是に増したる事あるまじ。地いかにくんと制すれば。岩浪も力を付け。御子息を息災で伴ひ給はゞわれく夫婦。再び結ぶ妹背の仲人。フシはやとくくと勧められ。地是非なく心を取直し。いかやう共御夫婦の御差圖は背くまじ。只此上は何事もよきにと歎きを押包み。フシあゆみ出るを。五斗は聲かけ。詞コリヤ女暫くまで。はるく吾妻へ下るとも生死不定の悴大三。切腹して相果つるか若。頼朝の手にかり空しくならばいかにく。地胸を定めて赴けと釘をさしたる夫の詞。げにことわりと走り寄り。泉が最前打捨し鐵炮小脇にかいはさみ詞御尋に及ぶべき。地いづれの道にも息子の大三。相果てしと聞くならば其折こそ頼朝は。我子の敵妹背の仇。たとへ年月経るとても。鎌倉に徘徊し。力業で叶はずば計略智謀の仕様も有り。鎌倉武士は色好み筒と出かけて口薬。詞咽の火ぶたのかけがねのはづれるやうなうまみを見込み。地ぼんといはせる二つ玉やはか仕損じ申すべき。氣遣有るな我夫といさめる體にこなたも勇み。出かした行けとの一言が。直に門出のフシはなむけや。地心はやたけにはやれども。娘の別の後髪引きはかへざし弓張の。盡きぬ歎を押包み。出でんとしては。ふり返り見

るも。見するも亡き魂呼ばひ。無常の風に盛りを待たて。吹散したる會者定離別愛。離舌を今爰に残して出づる都路や東の空へと急行く。

第 四 道行しづれがさ

雨にきる。田義の島とよみたれば。露もますげの笠はなか。フシなかるらん。笠と簀とに身を包みかくし持たる種が島。姿をかへて小脇指五斗が妻は。恩愛と義理と情を一つにかね。二人ともなき子の行方おぼつか。なみの夜をこめて。鎌倉山へと尋行く。フシヲクリこゝろのへ内ぞ。はてしなき。所態かまはぬ出立ばえ。ヲクリ素足に。わらぢ引しめてむすぶ庵のわび住居。ふせやの床とよそに見てフシ狩人。ならぬとりなりも。フシ人目の關の。忍ぶ草。しのぶ文字摺たれゆゑに。亂れそめにし我が思ひは。フシ子の命。たえなば敵。畏地ながらへば伴ひ歸り我夫と比翼連理の添臥を。思ひ勇みてちよこ／＼走り。はしりついたる水口のはを。ふせぎ兼ねたる雨の足しばしはれまに菅義や。フシかさを取る宮城野の露佐野の雪それさへ笠にしのげども。身一つに降る。小夜時雨袖のたきつせ血の涙。スエテ目もくれなゐに染なすは。紅葉笠とや名もしるき。つれなき色のまつがさも。ヲクリ肩を休めの慰みに東の空へ家づと。並木の枝に目を付けてねらひすませし種が島。火ぶた切る間にひよ鳥がふいととんだる翼の音に。胸はだくぼん坂の下。登ればさつさくだればさつさ。さつさ先退け先のけと手もふる里をフシ見返りて。フシひきもとさる。後髪。いと道さへはかどらず小ヲクリ野邊の薄の重りてそよと。風を便に舟呼ばひ。宮の渡しも月影やもに住む蟲のかはいらし實ねをさへて。ながめをにのふ田子の浦。江戸給富士のけぶりを。跡になし。はる／＼爰に。フシ清見がた。箱根の峠こゆるぎや田面に簀と加賀笠を。きたる姿はげにも實に。フシ名におふしづが花笠。ぬふてう鳥の翼には。かさ／＼も有明の。月の笠に袖さすは。天津乙女のきぬ笠。それは乙女是は又。賤の女の／＼。かづく袖笠ひち笠の。

雨のあしべの亂るゝ初しぐれあなたへざらり。こなたへざらり。ざらりゝざらゝづつと。風の上げたる古簾はてしもなくて又降りかゝる。雨の音。みの着ていそげ。笠きてヤレ。いそげ。フシいそぐたびぢもわが子の。よはひ。いのるは。千代や萬年の。龜がやつにもほどちかき小松。坂にぞ三重へ着にける

地兄弟親まざるは他人の始と諺の當れる哉。頼朝義經御中吳越と隔たりて。鎌倉よりの討手には梶原平三景時。數萬騎を引牽し早先勢は粟田口日の岡邊に滿ちゝたり。地堀川の御館にも五斗龜井は敵勢の。道を切らんと近江路や志賀辛崎迄出張して。路に残るは泉の三郎物の具かため士卒を集め。詞ヤア／＼汝等。敵は大勢味方は小勢。此度の討手は並々にては防れじ。地某思慮を廻らして。敵を欺く計略有りと云ふ所へ。腰元澤田走り出て。申しゝ三郎様。仰の通り奥を覗いて見ましたれば。殿様は例の御酒宴。静様の膝を枕におよつて御ざるが。地あの跡をまちつと覗いて参りましよとフシ云捨てゝ走り入る。地エ、いか程諫てもア、是非もなきお身持と。スエテ齒がみをなして立つたる折しも。間近く聞ゆる鯨波スハ事急に及びたり。方便の様子密に語らん。門々しめよと引連れて皆々。オクリ内に入りにけり。地程なく寄來る鎌倉勢。一面に充滿しフシときをとつとぞ上げたりける。地御館にはときをも合せず。門押開き洒掃し。物見の玉だれ事々と色をこめたる琴三味線。大將始め諸軍勢もけてん顔。番場忠進み出で。詞少しもためらふ所でなし。寄手を迷さん爲。智略らしくあまへて見せる化し事。地續や者共先陣は番場ノ忠太と。かけ入る所を景時おさへて。詞イヤ／＼恐るゝには徳有り。あなどるには損有り。地乗込て不覺をとるな是におり敷き敵の變を窺ふべし。詞ヤア／＼兵共。必ずゝ女の色にうかざるゝな。地琴三味線にのする共乗るまいぞと床儿にかゝり。館をにらんで控へたり。地靜御前は目もやり給はず。泉が手術をのみ込んで。敵の心を融せし。威陽宮の琴の音を思ひ出し。琴柱を律に立てかへて。歌七尺の屏風をこえしかどもゝ。スガ、キ落つる物。梅有り其花七つ八つ。九つ斗爲巾いと十。歌鹿いとしさを。糸にそむるか。しらべに。戀の色が出る。應ヲドリ花むらさきとこい紅の。色よりふか

いは戀の色。業平男。行平男。それよりフシ敵めはよい男。地手をつくし品つくす。琴の秘曲に寄せ手の兵。大將始め氣をうばはれ。魂ぬかしうつかりひよん。鷹歌岩木さへ。引手により来る。心を。今ぞつくし琴エイソリヤ引かれて。くれば名も立たぬ。笛には牡鹿か。浮かれて踊れ。うかれて踊れ。浮れて踊ればフシ名もたぬ。地うかれ浮され大將難兵そゝり立ち。覺えずしらずフシ門内へをどり入るにぞ。地追手の門をばはたとしめどつと作る相圖のとき。搦手より泉ノ三郎。手勢引具しをめて出づれば度を失ひ。逃げ場なければうろたへて。爰にかぐみかしこに走り。フシ討るゝ者ぞ多かりける地時に味方の聲々に。詞難兵に目なかけそ。大將梶原景時をのがすな。我君を讒言せし鎌倉のげぢくめ。地主従共に踏にぢれと。呼はる聲に胸ひやく。ひえる次手と水門より。フシ主従打連れ逃げて行く。地泉ノ三郎門外へ飛で出で。詞エ、殘念や討もらせしと。地齒がみをなして立つたる所へ。討もらされの難兵あまた。泉と見るより討つてかゝる。詞シヤしほらしきうんざい共。儕等殺すに双物は入らずと。地大手をひろげ一所にこいとフシ待ちかけたり。すきをあらせず取付大勢。とつてなげ付けつかんで打ちつけはらりと三重へ入つて。地此勢ひに恐れをなしフシ皆ちりくに逃散たり。地エ、よしなき事に隙取し。目ざす敵の梶原め。よし／＼今は討ず共。景時が首は我物。先づ／＼勝どき／＼と勇んで館へ。三重下歌年は文治の春の比。敵寄せきたるさゝ浪や。志賀の濱邊の戦ひに。さもいそがはしかりし身も。／＼。心の花か櫻木に。悲しと頼むかり枕。結ぶや春の夢。覺ての後はしら雪とちりつもる花ぞはかなき。地義經公の御内にて四天王と呼ばれたる五斗兵衛實基は文武二道を兼備へ。世上に眼高浪やはげしき勇者の指折に。二つと下らぬ一つ松唐崎の戦に。あまたの敵を切りちらし。とねりも俱せず只一騎フシ暫しつかれを春の日も。フシ志賀の浦風。吹きしきてさいた櫻も散るものと。花にいとひしあら馬のフシ高いなゝきも恨なる。地五斗はねむりの眼をひらき。詞あら面白の春の景色や。兄弟互にしのをきけつり双をあらそふ時しも有れ。しばし浮世のうき事を眠りに忘れし花の徳。地實に誠世の常の。スエテさくらは櫻是は又。志

賀の濱邊の雲井の花。無下にやみなんもいと本意なし。すぎし壽永の春の頃。源平の戦に。薩摩守忠度卿櫻の本にてまどろみ給ひ。つらね給ひし御歌に。スエテ旅行の花と題をする。行きくれて木の下陰を。宿とせば花や今宵のあるじならましと。吟じ給ふ御心と。五斗が今の身の上に。フ思ひ知られて痛はしや。是に付けてもあぢきなき親子の縁はうつろふ花。不便や可愛や大三郎我をつらしと恨むらん。今は親子の縁切れて。いろもちり行く兒櫻。此身の果の淺ましやと。涙の雨のフ古郷を思ひ。歎きてゐたりしが。詞ハツア我ながら正體なや。さしも名高き實基が我子を思ふ不覺の涙。花もさこそは笑ふらめ。地迷うたり。よく。思へば是ぞこの娑婆の絆を行きくれて。木の下陰の涼しき宿御法の花の主とならん。五斗兵衛實基が響はす一軍と。やだけ心のひと筋に身の討死を臆際や。思ひをながすしら波に。フシつれて寄せる國の聲。地すはや敵の近付と馬引よせてゆらりと乗り。鞍あち心にあぶみのはな向ふ汀の方よりも。地鎌倉勢の其中に梶原景時が郎等に番場忠太同藤太。宇津谷三郎なんどいふ。東をだちの荒武者共六七騎にてどつとよせ。五斗兵衛と知らばこそよき敵ござんなれ。通さじやらじと馬上をめがけ追取まいてむらむら。村重藤の本はつにしつかとすがつて引もどせば。しや物々し雜兵原と打なぐり。櫻の枝に弓打掛け。左に廻る三郎が綿上掴んで引上れば。振放さんともだゆるまに目より高く諸手に差上。きりくくる。大の男を人際打付られて宇津の谷が。心は苦しき葛かづら。フシはふ。命を遁れ行。地ついで左右にどつと寄せ番場ノ忠太。同く藤太是に有り。通さじと。むしやぶりに付いたる轡つら馬もいかりの高いなき。眞砂を蹴立る四本の足かけ出せば引もどし。こたへもこたゆる二人が力。よしなき妨げ手並を見よと兄は左弟は右。順逆二つを一掴み。指上げ。あら馬に打立て。人の鞭。有あふ端武者を追めぐれば。叶はじ物と夕浪の。岩に碎くる其ふぜいちりぢりばつと逃行を遁さじやらじと。三更追うて行く。地こ。一際はなく。敷く。絆をどしの胴丸に。五枚甲を猪首にきなし通錢蘆毛に乗つたるこそ。五斗大三基春なりけふの軍に討死と。思ひ込んだる武者ぶりに。おくれを見せずい

いうと。濱邊をさして歩ます。地五斗はむらがる大勢を駒の蹄にかけちらし。よき敵有らば一軍と馬引なほし歸りしが。スハはこそは能き敵と。駒を乗りすゑ大音上げ。調落行く中より只一騎返し合すは神妙々々。出立といひ其骨骸。御名ゆかしく候ぞや名乗れやつとぞ申しける。ヲ、人の假名を尋るには我名をなるが軍の法。辨へ知らぬ葉武者には合ぬ。フシ敵とあざ笑ふ。詞ヤア葉武者とは奇怪なり。義經公の御内にて四天王の其一人。五斗兵衛實基なり。合はぬ敵と歎きし御邊が假名いかにと。地聞より扱は父上かと。云んとせしが待て暫し。我首を父に參らせ。子に引されぬ武士と。父の御名を上げ給は。此上の本望なしと覺悟を極め。詞ホ、五斗と有らば不足なし。仔細有つて名は云ず。我首とつて高名せられよイザコイ。地勝負と打寄する。駒の足なみかつし。かし。片手手綱に打物かざし。うつや白刃のゑい。聲。ヤアエイしつてい丁々々と受けてははつしと拂ふ。鎧の袖もひら。ひら風のうら吹荒磯に。どうど打浪岩角に。碎けたばしる如くにて打寄せ。かけ寄せ。フシ付廻す。地馬も達者乗り人も達者。手綱にめぐる駿足の。轡の音はから。堅田の野路の草摺に住むかすだくか蟲の音か。いつを松蟲武士の。かうろぎ鈴蟲りん。ちりりんからめく兵具の金物。錘々として金鐵皆鳴障泥の音はばんばか。はねかへさんとかつしと當る。鎧のはなを乗りすかし。右手を廻れば弓手に進み。共にはなれずくる。くるりくる。フシ追めぐる。ゑい。さけびし其勢ひ。馬のさんづも今爰に修羅のちまたと切結ぶ。血氣の大三に修練の實基。甲乙見えざる二人が働き。半時計りの戦に更に勝負も付かざれば。いぞうれ組ん尤と。馬の上にてむずと組み。ゑいや。ともみ合しが。兩馬が間にどうど落ち。大三は上になりけるを。ゑいやつとはね返せば。覺悟を極め伏まるぶを我子と知らず取つて抑へ。すでに討たんとしたりしが。詞かほどけなげの武士を討取は天晴高名。いか成る者ぞ名を名乗れと。云ひも果てぬにア、愚なり五斗殿。運も力も御邊に劣り。組みしかれては候へ共弓矢の習ひは忘れぬ某。何面目に名を語らんとく。首をかき給へ。ム、ウ尤の一言なれ共。其名を誰れとも辨へねば。我高

名の其かひも並なみ々ならぬ御邊の武勇。埋木となす互の殘念。たゞ／＼名乗れと責せめ付くれば。地いや／＼なのらじいや名乗れ。いゝや／＼と争あそひも果し並木の松陰より。走寄つたる女の聲。ヤア大三様ではないかい。なと。さし覗のぞて。調ヤアほんに大三様ぢや。地お前にあはうばかりに玉世がはる／＼來たわいのと。聞くに驚おどろく五斗兵衛。大三郎は組伏せられし父の手前の恥しと。思ふ心に聲荒らげ。調いもせの契りをしたひくる心ざしはせつなれ共。戰場迄女をつるゝ大三郎といはれては。イヤ見ぐるしい地はや歸れと。詞のにべさへあらけなく。調さあ五斗殿。はやく首を討ち給へと。態わざと他人に云ひなす詞。地ヤア扱は舅御様かいのと。顔を見合す玉世は悔くり。五斗兵衛心をしづめ。調ム扱は御身は本田次郎近經が娘よな。劬大三と夫婦になりしと。沙汰には聞けども逢ふは始め。親子互に鎧よろぎをけづり。我子を殺ころす無得心と。女心の一筋に。地思はん事のうたてさよと。膝ひざをゆるめて立てんとする草摺くすりを下より引とめ。調其御心と知つたるゆゑならて討るゝ覺悟の命。組みしかれたる此儘の我存念を立てゝたべ。さもなくば起上り。此大三は生害しやうがいぞと。地聞くに悲しき玉世が心。ア、申し五斗様。いつ迄もおさえてゐてそのいて下さんすな。起ると其儘腹切らうと。つきつめたお心は日頃に私が知つてゐる。大三様を助けるはお前の腕うでの力ぞやと。あどなき詞に打うなづき。調其方が頼たのまいでも。大三郎は殺しはせぬ。過し頃鎌倉殿より。我を味方に招まねかるれど。泉と一旦約せしゆゑ。せがれを偽いつはり追返へす。地さすれば頼朝立腹りつぷくまし／＼。手討にもあひつらんと思ひの外。近經が養子やうしに下され。調そちと妹背いもせの語らひなし。假名も五斗を名乗と聞く。地其親の身の嬉しさは。フシいか斗と思ふらん。何卒なんぞ大三に廻り合ひ我首を取らせ。忠義に親を見替かしは。天晴の武士と。世上に汝を云はせん爲。爰かしこの手詰の合戦ひびつに秘術ひじゆつをつくし身を遁のがれ。又有る時はさもなき武士にも後を見せて實基はつが。朋友ともの討死に。けふ迄残りともまりしはナフ玉世。大三郎も聞いてくれ。調汝を助け下されし御恩を父か報はつぜん爲。今日只今の戦も。劬とは露知らず爰を大事と鎧よろぎをけづり。組んで落たる兩馬が間。運つよくもはね返し。取つておさへし我大力。我ながら實基は剛成がうせいる

者と心の自慢^{じまん}。ハアはづかしや。地面白なや。地今よく思ひ合すれば最前五斗と聞しゆゑ。我に首をくれん爲なのりもやらず討れんとは。さすが父が名を惜む心ざし。ハアてかしたくさりながら。詞我君姪酒に迷ひ給ひ。士卒^{しそ}の心まちくなれば再び御運は開かるまじ。地物數ならぬ我ながら首取つて頼朝の。實檢^{じつけん}に供へてくれ。さすれば五斗の家も立つ。頼むくと身を惜まぬ。フシ義者の詞ぞいさぎよし。詞ハア、有難き仰せ成れ共。御覽候へあの山々。並あるは鎌倉勢。濱手の方は京都の軍兵。兩陣互に押並び數萬騎の見る所。五斗大三は組しかれ。其上に助られ。恩を仇なる首取しと嘲り笑はんは必定^{ひつてい}。地只々拙者が首を打ち父上の名を上げてたべ。但し助かつて基春^{もとる}に。つらよごせとの御事かと。スエテ恨みの詞も理にせまれば。實にもく武士のおもては濟ぬ敵と敵。詞ヤアこれ玉世。女房傍に有りながら。現在^{いま}夫を手にかくる。五斗兵衛は通されまじ。サア我を切つて大三を助けよ。エ、イゑゝいとはうるたへたか。女てこそ有れ本田が娘。其一腰は何の爲。さあく抜いて打かけよ。地早くくとせり立られ。なう情ない仰事。私はお前を切うとて。はるく都へきたかいな。無理もわやくも事による。仰を背くが悲しいとて。嫁の身として大事の舅御。そもやくわしやいやく。是ばかりは何ぼでも。詞ヲ、さうぢやく玉世。此大三が命かばふな。夫の親は實の親にも見替ぬが操々。地心得たかと聲かくればいやさこれ玉世。詞夫を守つて舅のいふ事を背くか。背けば直に大三を殺し。親子でないがそれでも討ぬか。地夫まだそんな悲しひ事。親子の縁を切るまいとお首を切つてしまうては。どのお命で女夫の結び。詞ヤアぐちく。親子は一世と言ながら。永き契りの夫はなんと。地サア夫れは。詞サア討てく討たねば切るぞ。ヤアコリヤうつたらばすぐに離別^{りべつ}。未來永々夫婦でないぞ。地サア切らうとはいひませぬ。詞いゝや切らねば親が勘當。いや切つたらば夫が離別。必ず切るな。いや切れと。舅がせむればとむる夫。悲しさつらさ身一つにわつとさけびて歎きしが。地涙の内に胸を極め。ア、うろたへたりさうぢや物と。すそかい取つてさもり、敷こしの刀を拔放せば。詞コレく玉世。ソリヤ何する。夫の詞背くかと。地たけりもだゆる

大三をば。起さじ物とおさへ付け。調出來たてきた。夫れてこそは五斗が嫁。地サア討てくと言さしのべ双を待つたる實基か。後へ廻り太刀振上。右の腕を打落すと。見えし双は刀の背。何のつづがもあらざれば。大三郎は安堵の思ひ。玉世は刀からりと捨て。大事の舅を嫁の身で。夫に背いて双向ひし。天道の咎めにて双がねが背へ廻つたなど。了簡つけて堪忍して。元の通りの我嫁とたつた一言おつしやつて。夫諸共比場の命ながらへて下さりませ。一人は舅御ひとりとは殿御。どちらをどちらとわけがたき。心の内の悲しさを思ひやつてとかきくどく。涙の玉も亂塵。刀の背にをさめし思案。二人にそむかぬ發明はようがしこうて哀れなり。五斗兵衛は打撃き。詞ヲ、てかされたり玉世。天晴御身は近經が娘ぞや。此實基に双を當つれば心も剛成る武士の妻。背で討たうが双でうたうが右の腕は討たれたり。地腕こそは切らるゝ共大三と夫婦の手はきれじ。もとのごとくの嫁舅。此上とても中よくせよと。左の手にて大三郎を引おこし。今は叶はぬ右の腕汝を討つべき手もなければ。我助けしといふには非ず運つよき五斗大三。我首をサアとれよとフシどうと。坐して云放せば。詞ハツア有難き父の恵。何と報せん詞もなし。さりながら子の身として現在の親を手につけ。地手柄せしとて何の益。いや只とかく某がと。刀拔持ち自害の體。やれはやまるな夫れ留めよと。差圖にすぎる玉世の前。心はせつなき涙の下。お前を助けう計に。心をくだきしかひもなう自害とは何事ぞや。爺御様もあんまりな。大三様の身にもなり。少しは心を思ひやり。此場をのがれフシ給はれとかきくどきたる恨泣き。ヲ、さすかは女よな。詞淺はかなる心より恨むるも理。コリヤ大三。汝は未だ知るまじきが。様子有つて妹徳女は。自害して死んだわやい。エ、イして母様は。ヲ、母の關女は一旦離別したれ共。大三郎をばひかへして連れ來らば。元のごとく夫婦にせんと。地泉が云ひしを力には鎌倉へ下り。汝が行方を爰かしことさぞや尋んフシ不便さよ。又某は最前もいふごとく。頼朝公の大神恩を受け其恩を報せんずば。鬼畜にも劣るべし。それゆゑに此度は父が最後のはれ軍と。覺悟極し上なればとても助かる所存はなし。汝は父が首を持ち鎌倉に下り。右の様子を頼朝公へ恐れながら言上申

し。五斗の家を引起し。我妄執を晴らさん者。汝ならではなきぞとよ。地心餘つて詞には。たらぬ思ひを知れやとてかこちなげけば玉世の前。大三も涙せきあへず。スエテ恨を何と夕浪のフシ打しほれてぞ泣居たる。地時刻もしばし移り行く日影も西の濱手より。爰に一筋飛箭の來ると見えしが基春が。右手の肩先はつしと立ち籠もふかゝといた手の血汐。實基玉世もコハいかにとフシ道に。あきるゝ計りなり。地大三郎につこと笑ひ。詞ハツア有難や忝なや。我心をあはれみて天より與ふる飛箭ぞや。此上に論義はなしサア我首を打つてたべ。とは云ひながら妹は先立ち。母様は東に下り。此大三を尋廻り。地行方知らねば云譯なしと。自害がななざれんかと。夫が悲しいゝとわつと歎けば玉世の前。正氣正體泣きくづをれ。コレ大三様。お前に最一度此世にてあはうゝを力草。知らぬ旅路を來た物をむごらしい此おすがた。どこのやつめが射くさつて此ながれ矢は何事ぞや。神様も佛様もあんまりむごい聞えませぬ。思へば鎌倉をお立の時形見にせよと残されし一首の歌が氣にかゝり。肌身も放さず持つてきた。是此短冊見給へと涙ながらに取出し。五斗に渡すを押取つて吟じて見れば。詞武士の。弓矢の道はをしまねど。うづもれ果つる名こそをしけれ。ハツアさすが五斗が胤程有る。でかしたゝ。武士の名を後代に残すこそ。弓矢取る身の習ひなれ。さるによつて汝が首取り。譽を末世に残して得させん。心よく最期をとげよ。まつた某もながらへ有らば。何とぞ母にめぐりあひ。さいごの様子云聞せ。汝が跡を弔はらず。地妹徳女に未來て逢はば。父も追付け行程に。半ん座をわけて待つといへ。さらばゝと涙を拂ひ思ひ切つたる其風情。ア、有難やと安堵の最期。西拜まんと手を合すれば。實基が氣を取直しふり上る。劔の光もあきらけき。謠光明遍照十。方世界と。すゝむる聲に玉世のまへ。ともに唱ふる十方世界の悲しい事を身の上にとどめたるあさましさと。スエテ譯も涙のくりごとに。地大三郎は眼をとち。念佛衆生攝取不捨と唱ふる聲の下よりも。ひらめく劔に若木の櫻。ちり行く身こそはかなけれ。玉世はわつと取亂し。目もくれ心きえゝと。涙にむせてことのはもなき夫の首から抱き。前後不覺に泣沈む。思ひのかずゝ、フシ實基もしば

し。歎きにくれけるが。地ア、我ながらよしなき涙身の高名を顯はすは。船が簪の其一つとくもれる髻を取直し。調遠からん者は音にも聞け。近からん者は目にも見よ。鎌倉殿の御内にて五斗大三基春を。五斗兵衛が打取つたりと。呼はりながらしをく／＼と首を衣にて押包 スエテ涙と共に身にそへて。調是々玉世。あへなきからだ妻の役よきに葬り弔はれよと。云捨て立上るを。なうこれ暫し待つていなう。此御骸を葬りても肝心のお首がないと。思へばどうやら心の迷ひ。弔ひも追善もとどかぬ未來のかたびんぎ。五體そろはぬ其人は。佛にはならぬとかや。此上の御慈悲に。其お首をもフシ給はれよと又泣。しづむぞ道理成る。地五斗げにもと思ひしが。詞ハツア大事を忘れたり。首實檢の期に及んで。玉世が歎く不便さに。首は興へて候と言譯も成るまじ。又泉龜井兩人が。疑ひ受けんも弓矢の恥。というて眼前玉世のまへ。歎くを見すて、行かれもせず。地とやせんかくやヲ、それ／＼。望に任せ大三が首玉世に與ふるうけ取れと。いぜんの短冊さし出せば。と、様是はどうぞいな。此短冊をお首とは。ヲ、それこそは大三郎が形見に讀し歌一首。一首とかいて一つの首と讀ざるや。是此からだに其短冊連續したる三十一文字。五倫五體のてにはよく題に叶へば御佛の。心になふ詠歌の徳。未來はまさに極樂淨土何か疑ひ嵐の音に聞えたる時の聲は法の聲。手向の香花忘るなど。いさめすかせば玉世の前あつとかんじて有がたき。舅のめぐみを嬉し泣き夫に別れの涙の時雨。ふりみふらずみ定なきあまのしほ木もなき人の。身には無常の夕けぶり立別れ行く玉世のまへ。歎きの種をわけ残す。木の下陰の思ひの宿涙を袖のあるじとは。かゝるうき身を夕ぐれのいきを都の伴ひに。志賀の浦風吹残す花も名残や惜むらん。

第 五

地流水岩に砕れども末は一つの源や。頼朝公の御前には在鎌倉の諸大名威儀を正して相つめ。都よりの軍の知らせ櫛

の齒を引くごとく成れば。フシ評定取々まち／＼なり。地奏者の侍罷出て。調都堀川の御所より。御使者として龜井の六郎重清。地參りぞふと訴ふれば。スハ又例の計略ならん。油斷有るなと諸大名フシ心をくばる計りなり。地賴朝暫く御思案有り。調軍半の都を明け。一騎當千の六郎を指越す事仔細あらん。地何にもせよ是へ通せと御説の下。立出る龜井の六郎。錦戸伊達の兄弟を高手小手にいましめ。御前間近く諱て。調主人義經反逆なき申譯は。先達つて靜御前。人質として差下せとの御説。權ノ頭兼房早速受合候所。主君をいさめ兼ね忠死仕る。夫れに付是成る錦戸靜御前の養父と成り。姪酒の二字を以て主君を失なひ。儕が都を守護せんたくみ。明白に顯れしゆゑ。地急ぎ兩人を召捕鎌倉へつかはし。義經が親兄の體を重んじ。毛頭別心なき條申開けの仰を請け。夜を日について參上し。讒者の舌にさへられ思はず君に双向ふこと。本意を背くと後悔最中。調とりこに成りし五斗が妻も此たび本田ノ近經より。都へ送り返されし段。地是迄敵たい致す事ほぞをかんて神文を相加へ。愼んで差上る間和睦の一段。ひとへにねがひ奉ると辯舌水の流るゝがごとく。さもいさましくのべければ。地君も疑心を止られて。調義經方より和睦を乞はば。我に別心有るべからず。又錦戸兄弟は。本田近經にまかせ置き。追て沙汰を極むべしと地聞くに龜井は安堵の胸。使者の面目有がたしとフシ悦ぶ事は限りなし。地賴朝甚御機嫌よく。調義經が胸中相知れし事此上や有べきと。地御盃を下さるれば龜井すさつて押戴き。此盃を都へ上り我君に頂せ。其返盃を鎌倉へすぐに治る天下太平。一張の弓の勢ひに東南西北靡き従ふ君が代や。民も豊かに五穀は實のり。榮え／＼て源と氏治る。國こそめだたけれ。

延享元年甲子三月

去人懇望ありて。大作のほつれに古きをつぎたし。是非に五段にして板行におよぶ。

櫻木に咲を見まねや作花

後 藤 目 貫 終

